日本職業・環境アレルギー学会雑誌

OCCUPATIONAL AND ENVIRONMENTAL ALLERGY



Vol. 17-2 2010年5月

日本職業・環境アレルギー学会 JAPANESE SOCIETY OF OCCUPATIONAL AND ENVIRONMENTAL ALLERGY

目 次

総説 理・美容師の職業性皮膚炎	西岡	和恵・・	2,02,03		1
原著					
職業性皮膚疾患のまとめ	杉浦	啓二、	杉浦」	真理子	11
原著		澄都、			
抗喘息薬による気管支喘息患者のヘリウム・フローボリューム	三重野	ゆうき、	井水7	>ろみ	17
曲線の変化	小橋	保夫,	加藤	敦	11
	米田	有希子、	清水	秀康	
	星野	多美、	内山	康裕	
	竹内	保雄、	戸谷	嘉孝	
	齊藤	雄二,	佐々ス	木文彦	
	岡澤	光芝、	榊原	博樹	
原著					
スギ花粉症合併喘息におけるスギ花粉飛散時期の鼻炎および	渡邉	直人、	足野	誠	
喘息症状増悪に対するプランルカストとフェキソフェナシン の効果の比較検討	中川	武正、		輝臣	25
原著					
アトピー性皮膚炎患者の仕事に対するストレスとその解消法の	杉浦』	与理子、	杉浦	啓二	25
アンケート調査	前田	晴美			0.0
日本職業・環境アレルギー学会会則		erickers.	بتنجوبتن	5221357	41
日本職業・環境アレルギー学会役員					
日本職業・環境アレルギー学会誌投稿規程					44

第 41 回日本職業・環境アレルギー学会総会・学術大会 第 57 回日本産業衛生学会アレルギー・免疫毒性研究会 合同大会 開催予告

1. 会 長: 土橋 邦生 (群馬大学医学部保健学科)

2. 会場:高崎ピューホテル

〒 370-0815 群馬県高崎市柳川町 70 TEL: 027-322-1111 FAX: 027-323-3218

3. 会 期:平成22年7月16日(金)·17日(土)

4. 参加費: 一般 8.000 円 学生 2.000 円 (当日学生証を提示) 懇親会費 2.000 円

5. 連絡先: 〒 371-8514 群馬県前橋市昭和町 3-39-15 群馬大学医学部保健学科 土橋研究室 第 41 回日本職業・環境アレルギー学会総会・学術大会

第57回日本産業衛生学会アレルギー・免疫毒性研究会

合同大会事務局 TEL&FAX: 027-220-8944

E-mail: kdobashi-alg@umin. ac. jp URL: http://oea. umin. jp/

6. 大会プログラム

◎第41回日本職業・環境アレルギー学会総会・学術大会

♣♥シンポジウム「職業性アレルギー疾患ガイドラインの作成の試み」

座長:大田 健(帝京大学医学部 呼吸器・アレルギー内科)

土橋 邦生 (群馬大学医学部保健学科)

1) 職業性喘息

石塚 全 (群馬大学大学院医学系研究科病態制御内科学呼吸器・アレルギー内科)

2) 職業性アレルギー性鼻炎 字佐神 篤 (東海花粉症研究所)

3) 職業性皮膚疾患

松倉 節子 (横浜市立大学附属市民総合医療センター 皮膚科)

4) 感作性物質(化学物質)の新分類基準

佐藤 一博(福井大学医学部環境保健学)

ランチョンセミナー1「環境アレルゲンと One Airway One Disease」

永田 真(埼玉医科大学呼吸器内科)

ランチョンセミナー2「黄砂のアレルギー増悪作用」

市瀬 孝道(大分県立看護科学大学人間科学講座生体反応学)

特別講演1「環境因子からみた気管支喘息の病態と治療」

石井 芳樹 (獨協医科大学呼吸器アレルギー内科)

♣♥教育講演1「環境アレルゲンとアレルギー疾患」

西岡 謙二 (国立病院機構相模原病院臨床研究センター)

会長講演「環境と喘息」

土橋 邦生 (群馬大学医学部保健学科)

- ◎第57回日本産業衛生学会アレルギー・免疫毒性研究会
 - ♣♥基調講演「情動ストレスと包括的脳機能統御 ―音楽による反応機能―」

森本 兼曩 (大阪体育大学)

- ♣♥特別講演2「環境要因が生体の免疫機能に及ぼす影響―プラス影響とマイナス影響の視点から―」 事 卿(日本医科大学衛生学公衆衛生学)
- ♣♥教育講演2「化学と医療におけるデータ解析の基本と適用事例(化学物質構造と過敏性の相関解析(QSAR))」 湯田浩太郎(株式会社インシリコデータ)
 - ♣教育講演3「群馬県における小児アレルギー性疾患の疫学とその要因」

小山 洋 (群馬大学大学院医学系研究科社会環境医療学講座公衆衛生学分野)

7. 恳親会(情報交換会)

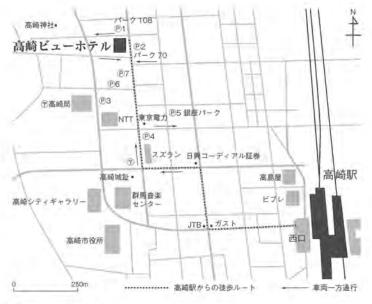
※単位取得について

日本職業・耳	環境アレルギー学会	日本アレルギー学会認定専門医	発表3単位	参加 4 単位
7月16日	♣日本医師会生涯	重教育講座	2単位	
	♥日本医師会認知	它産業医研修 (生涯·専門)	2単位	(申請中)
7月17日	♣日本医師会生派	王教育 講座	5単位	
V	♥日本医師会認知	定産業医研修(生涯・専門)	4 単位	(申請中)

高崎ビューホテル

群馬県高崎市柳川町 70 TEL: 027-322-1111

◆電車で JR上野駅より特急で約1時間20分、高崎駅下車。 JR東京駅より上越・長野行き新幹線で約50分、高崎駅下車。 高崎駅西口より徒歩で約15分、タクシーで5分。 群馬バス「安中」「松井田」「箕郷」「室田」行 他。バス停「本町二丁目」下車 徒歩約4分。



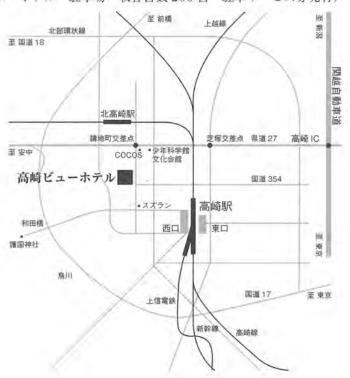
◆車で 関越自動車道 高崎IC

上信越自動車道 藤岡 JCT→ 関越自動車道 高崎 IC 北関東自動車道 高崎 JCT→ 関越自動車道 高崎 IC

東北自動車道 佐野藤岡 JCT \rightarrow 国道 50 号 \rightarrow 太田 IC 北関東自動車道 高崎 JCT \rightarrow

→関越自動車道 高崎 IC

高崎 IC より県道 27 号(駒形線)を高崎・安中方面へ約15分。 (高崎ビューホテル 駐車場 収容台数200台 駐車サービス券発行)



総説

理・美容師の職業性皮膚炎

西岡和恵

ジョイ皮ふ科クリニック

抄 録

理・美容師は手の皮膚炎が高頻度にみられる職業である。シャンプー剤などの界面活性剤を用いた水仕事により皮膚のバリアー機構の障害をきたし、容易にアレルゲンが侵入する状態になり染毛剤などによるアレルギーをきたす。特に洗髪などの作業の多い就業後6ヵ月以内のものや、アトビー性皮膚炎を有するものに好発する。臨床病型には乾燥性変化を主体とする刺激性接触皮膚炎と、瘙痒を伴い紅斑、丘疹などの湿疹性変化を生じるアレルギー性接触皮膚炎がある。理・美容師のアレルギー性接触皮膚炎での主たるアレルゲンは、パラフェニレンジアミンをはじめとする酸化染毛剤成分であるが、その他にパーマ液中のチオグリコール酸、ニッケルなどの金属、香料、作業用ゴム手袋中の加硫促進剤などの感作例も見られる。パッチテストにより原因を明らかにし、皮膚炎の再発、悪化を防ぐための生活指導を行うことが重要である。アレルギー性接触皮膚炎を発症した理・美容師の職業的予後は不良であり、職業の継続のためには職場をはじめとする社会的な環境整備が必要である。発症予防のためには、職業教育の早い段階で職業性接触皮膚炎についての知識を与え、作業時の手袋の着用やスキンケアによる防御を実践させることが肝要である。

はじめに

理・美容師は、洗髪、カット、パーマネント、 染毛などの手作業を連日繰り返し実施してお り、高頻度に手の皮膚炎を発症する。理・美容 師の職業性皮膚疾患を取り扱う際には、単に対症的に皮膚炎を治療するだけでは問題が解決せず、パッチテストによる原因検索や、職業継続のための方策についての幅広い対応が求められる。本稿では、理・美容師の職業性皮膚疾患について、その発症機序、頻度、病型、好発年齢などの一般的事項を、ついでアレルギー性接触皮膚炎での原因検索、職業予後について述べ、最後に職業予後を改善するために今後どのような対応が望まれるかを述べる。

〒 756-0806 山口県山陽小野田市中川 6-4-1 ジョイ皮ふ科クリニック 西岡 和恵 TEL 0836-81-4112

1. 一般的事項

理・美容師は、最も高頻度に職業性接触皮膚 炎を発生する職業であり、荒尾らりは職業性接 触皮膚炎・湿疹群に占める理・美容師の割合は 113/959 (11.8%) であったと報告している。本 邦での理・美容師に対するアンケート調査での 皮膚炎の頻度について、平松ら³⁰、谷田ら³⁰は 半数以上が、現在ないし過去に皮膚炎を経験 していたことを報告している (表1)。

その発症機序としては、シャンプーなど界 面活性剤を用いた水仕事により皮膚パリアー 機構に障害をきたし、染毛剤などのアレルゲ ンが侵入してアレルギー性接触皮膚炎を発症 すると考えられ、臨床病型は刺激性接触皮膚 炎とアレルギー性接触皮膚炎に大別されるが、 アレルギー性接触皮膚炎患者では、刺激性接 触皮膚炎も並存して認められる場合が多い。 Otsuki ら の美容師でのアンケート調査では、 手に何らかの皮膚症状を有したものは79%に 上り、皮疹の分布から 1/10~1/5 がアレル ギー性接触皮膚炎に罹患していると推定され たと報告している。刺激性接触皮膚炎では、 乾燥、鱗屑、亀裂などの症状を示す(図1)。そ れに対しアレルギー性接触皮膚炎では瘙痒性 紅斑、丘疹、苔癬化などの湿疹型の反応を示し (図2)、皮疹の部位も手部から前腕にとどまら ず、それ以外にも波及することが稀でない。 アレルギー性接触皮膚炎を考え、パッチテス トを施行した自験30例の検討。では、両手から 前腕の範囲にとどまるものが17例、それ以外 にも波及したものが13例であった。また自験 30 例中 21 例 (70.0%) が 10~20 歳台であ り、27 例中 13 例(48.1%)が就業開始の 6 カ

月以内に発症し、アトピー性疾患の既往ない し合併は10例であった。Xie らの報告でも、 32例中21例が6ヵ月以内に発症し、アトピー 性疾患のあるものは32例中16例であり、理・ 美容師の職業性接触皮膚炎は、洗髪などの作 業の多い就業後6ヵ月以内のものや、アトピー 性皮膚炎を有するものに好発する傾向がある。

2. アレルギー性接触皮膚炎

理・美容師の職場には、染毛剤、パーマネン ト液、整髪料、鋏、輪ゴム、作業用手袋など多 数のアレルゲンとなり得る物品が存在してい る。アレルギー性接触皮膚炎が疑われた症例 で、原因となっているアレルゲンの確定には パッチテスト (贴布試験)を行なうで。理・美 容師におけるパッチテストでは、本人の使用 している製品とともに、関連のアレルゲンシ リーズを用いて行う (表 2、図 3)。 自験例での パッチテスト結果のでは、アレルギー性接触皮 膚炎での主たるアレルゲンは、パラフェニレ ンジアミンをはじめとする酸化染毛剤成分で あり、その他にもパーマ液、シャンプー、リン ス、整髪料などの製品、またパーマ液中のチオ グリコール酸、ニッケルなどの金属、香料など の感作例も見られた。Xie ら い、東 い、谷田ら い の報告でも同様の傾向が見られ、酸化染毛剤 成分の陽性率はパラフェニレンジアミンでは 70~90%台、パラトルエンジアミンでは50% 前後であり、次いでパラアミノフェノールに 高い陽性率を示していた(表3、4)。パラフェ ニレンジアミンはパラトルエンジアミン、パ ラアミノフェノールなどの酸化染毛剤成分、 皮革用染料のパラアミノアゾベンゼン、衣類

表1 本邦での理・美容師に対するアンケート調査での皮膚炎の頻度

	皮膚炎が現在あり	過去に皮膚炎あり	現在ないし過去に皮膚炎あり	現在も過去も皮膚炎あり
平松ら ²⁰	41/155	54/155	95/155	
(2000年)	(26.5%)	(34.8%)	(61.3%)	
谷田ら ³⁾	281/1733	657/1733		274/1733
(2008年)	(16.2%)	(37.9%)		(15.8%)

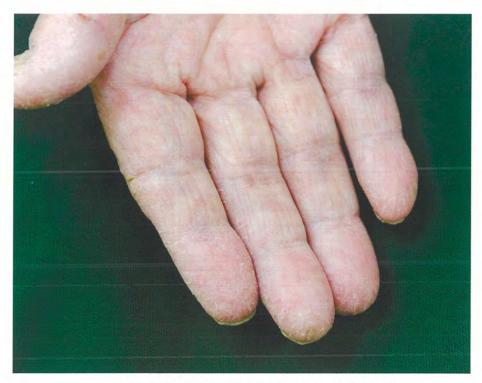


図1 刺激性接触皮膚炎(指尖部の乾燥、鱗屑、亀裂)



図2 アレルギー性接触皮膚炎 (手背、指の瘙痒性紅斑、丘疹、苔癬化)

表2 理・美容師に関連するパッチテストアレルゲン

試料	濃度/基剤
パラフェニレンジアミン*	1%/pet
パラトルエンジアミン	1%/pet
オルトニトロパラフェニレンジアミン	1%/pet
オルトアミノフェノール	1%/pet
パラアミノフェノール	1%/pet
メタアミノフェノール	1%/pet
メタフェニレンジアミン	1%/pet
2, 6ジアミノピリジン	1%/pet
パラアミノアゾベンゼン	0.25%/pet
R-225	1%/pet
PPD- ブラックラバーミックス*	6%/pet
ピクラミン酸	1%/pet
ピロガロール	1%/pet
レゾルシン	1%/pet
フェノール	2%/pet
チオグリコール酸アンモニウム	1%/pet
コカミドプロピルベタイン	1%/pet
硫酸ニッケル*	2.5% pet
塩化コバルト*	1%/pet
香料ミックス*	8%/pet
チウラムミックス*	1.25%/pet
メルカプトミックス*	2%/pet
ジチオカーバメートミックス*	2%/pet
白色ワセリン	as is
蒸留水	as is

文献9) より改変して引用

^{*:}日本接触皮膚炎学会標準アレルゲン系列のアレルゲン



図3 パッチテスト結果。酸化染毛剤成分のパラフェニレンジアミン(PPDA)、パラトルエンジアミン(PTD-2HCL)、パラアミノフェノール(PAP)および構造類似化合物のパラアミノアゾベンゼン、R-225に陽性

表3 職業性接触皮膚炎を生じた理・美容師での持参製品のパッチテスト結果

試料		染毛剤	シャンプー	パーマ1液	リンス
	Xie 56	21/29 (72.4)	7/30 (23.3)	17/31 (54.8)	-
陽性例数 / 施行例数 (%)	谷田ら3)	35/55 (63.6)	24/59 (40.7)	21/53 (39.6)	3/26 (11.5)
	自験例	20/28 (71.4)	7/28 (25.0)	7/29 (24.1)	1/27 (3.7)

表4 職業性接触皮膚炎を生じた理・美容師での酸化染料のパッチテスト結果

	PPD	PTD	OAP	PAP	MPD	MAP
Xie 5 ⁸¹	27/32 (84.4)	17/32 (53.1)	2/32 (6.3)	12/32 (37.5)	-	2/32 (6.3)
東	36/38 (94.7)	17/38 (44,7)	-	16/38 (42.1)	5/12 (41.7)	2/30 (6.6)
谷田らり	36/49 (73.5)	4/49 (8.2)	-	5/49 (10.2)	-	1/49 (2.0)
自験例5	28/30 (93.3)	17/29 (58.6)	6/28 (21.4)	8/29 (27.6)	2/28 (7.1)	0/28 (0.0)
	東** 谷田ら**	Xieら® 27/32 (84.4) 東® 36/38 (94.7) 谷田ら® 36/49 (73.5) 自験例® 28/30	Xieら® 27/32 (84.4) 17/32 (53.1) 東® 36/38 (94.7) 17/38 (44.7) 谷田ら® 36/49 (44.9) (73.5) (8.2) 自験例® 28/30 17/29	Xie ら (84.4) 27/32 (7.32) 2/32 (7.32) (84.4) (53.1) (6.3) 東 (94.7) 36/38 (94.7) 17/38 (44.7) 谷田ら (73.5) (8.2) - 自験例 28/30 17/29 6/28	Xieら® 27/32 (84.4) 17/32 (6.3) 12/32 (37.5) 東® 36/38 (94.7) 17/38 (44.7) 16/38 (42.1) 谷田ら® 36/49 (44.7) 4/49 (73.5) 5/49 (10.2) 自験例® 28/30 17/29 6/28 8/29	Xie ら® 27/32 (84.4) 17/32 (53.1) 2/32 (37.5) 12/32 (37.5) — 東® 36/38 (94.7) 17/38 (44.7) — 16/38 (42.1) 5/12 (41.7) 谷田ら® 36/49 (44.7) 4/49 (10.2) — 5/49 (10.2) 自験例® 28/30 17/29 6/28 8/29 2/28

PPD: パラフェニレンジアミン OAP: オルトアミノフェノール PAP: パラアミノフェノール MAP: メタアミノフェノール

PTD: パラトルエンジアミン MPD: メタフェニレンジアミン

の染料の disperse orange 3 などのアゾ色素、 化粧品に用いられる色素の R-225、ゴムの老化 防止剤の N - イソプロピルー N' - フェニルパ ラフェニレンジアミン、N-1、3-ジメチル ブチルー N'-フェニルパラフェニレンジアミ ンなど多くの物質に対し交差反応を示す。ま た酸化染毛剤以外のアレルゲンにも陽性を示 す多感作例が見られることから、避けるべき 物質の範囲について充分な説明を行い、注意 を促すことが重要である%。

3. 職業予後

われわれ 5 10 はパラフェニレンジアミンに陽 性反応を示し、ヘアダイによる職業性接触皮 膚炎と診断した21例に対し、職業予後に関す るアンケート用紙を郵送し、16例(76.2%)か ら回答を得た。回答の得られた内訳は、男性5 例 女性11例、年齢は19~36歳であった。そ の結果、9例(男性1例、女性8例)が離職し ており、その理由が皮膚炎であったものが8

例、皮膚炎以外であったものが1例であった。 一方、職業を継続していたものは7例(男性4 例、女性3例)であり、これらの職業継続例の 全例に現在も皮膚炎があった。性別、年齢、美 容師歴およびパッチテスト陽性物質と職業予 後との関連を検討したところ、離職群では、女 性、19~21歳の若年者、美容師歴2年以内が 多かった(図4)。またパッチテストでヘアダ イ関連物質のみに陽性を示す例とヘアダイ関 連物質以外の物質にも陽性を示す例とで、離 職・継続に一定の傾向はなかった。Matsunaga ら 11 は 12 例のアレルギー性接触皮膚炎のある 理・美容師の職業予後を調査し、5 例が継続、 7 例が離職していたと報告している。また Laing ら¹²は、パッチテスト陽性を示した美容 師 21 例中 14 例 (66%) が、皮膚炎のために離 職していたことを報告しており、皮膚障害の ために離職する美容師が少なくないことは残 念なことである。

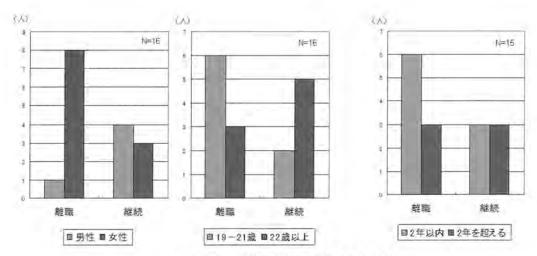


図4 性別、年齢および美容師歴と職業予後

4. 今後に向けて

理・美容師の職業性皮膚疾患を診断、治療し ていく中で、その職業予後を改善していくに は、どのような方策が考えられるであろうか。 これまでの報告で、作業時の充分な防護が行 われていない実態が示され問題点として指摘 されており、接触皮膚炎発症の予防のために は、(1) 職業教育の早い段階で職業性接触皮膚 炎についての知識を与えて注意を促す、(2)就 業の早期から染毛の際は必ず、洗髪やパーマ ネントなどの際にもできるだけ手袋の着用に よる防御やスキンケアを実践させる、(3)アト ピー性皮膚炎のあるものは職業選択の段階で 熟慮して進路を決定するなどの注意点が挙げ られる。また、すでに職業性接触皮膚炎を発 症した理・美容師に対する対策としては、(1) パッチテストを行い、皮膚炎の原因となって いる製品や成分、交差反応を生じる物質など について充分な説明を行い注意を促す、(2)手 袋による防御やスキンケアを徹底する、(3)染 めたばかりの毛髪に素手で触れたり洗髪をし ないこと、使用した器具の洗浄の際も手袋を 着用すること、染毛剤で汚染された手袋を繰 り返し着用せず適宜交換することなどのきめ 細かな注意が必要である。

一方、職業予後の改善のためは、理・美容師 を囲む社会にも理解や対策が求められている。 まず職場では、職業の継続のためには職場(特 に上司)の理解が必要であり、経営者は職業病 であるとの認識に立ち、治療や検査のための 通院を労災として扱い、防止対策を立ててい くという姿勢が求められている。また製造者 には、ヘアダイ、防護具などのより安全で有用 な製品の開発を行なうことや、製品の持つ危 険性についても注意を促す努力をすることが 求められており、行政に対しては、パラフェニ レンジアミンなどのパッチテスト試薬の入手 を容易にして、診断の確立に寄与すること、 理・美容師の衛生管理の推進を行なうこと、履 修項目に職業性接触皮膚炎を組み込むことな どの対策をお願いしたい。また理・美容師の接 触皮膚炎が広く認知され、手袋を着用して作 業を行なうことに一般の利用者が理解を示す ような社会となってほしい。そのためには思 者や社会に対して、理・美容師の抱える問題に ついての情報を発信することが必要であり、 谷田ら131は、理・美容師の手あれ予防ガイド ブックを発刊しており、広く利用されること が望まれる。またイギリスでは政府機関がイ ンターネット上で、理・美容師の職業性皮膚障 害についての詳細な情報を発信しており (http://www.hse.gov.uk/hairdressing/index. htm)、その積極的な姿勢は見習うべきものがあると思われる。

また今後、臨床的に注意してみていく必要 がある問題として、1) ヘアダイ成分による即 時型反応を生じる可能性と 2) 界面活性剤によ るアレルギー性接触皮膚炎の増加を挙げたい。

上述のように、理・美容師のアレルギー性皮膚炎は酸化染毛剤を主体としたアレルゲンが関与した遅延型の免疫反応であるが、被染毛者におけるヘアダイによる接触蕁麻疹症候群の報告は稀ならずあり、われわればも2例を報告したがその後も同様症例を積み重ねている。本邦では理・美容師の即時型反応例の報告は見られないが、Edwards¹⁵はパラフェニレンジアミンによる接触蕁麻疹とアレルギー性接触皮膚炎を合併した美容師例を報告している。本邦の理・美容師でも同様症例が発生しておかしくない状況であり、注意を促す必要がある。

理・美容師では皮膚の乾燥、亀裂などの手あ れの症状を示すものは多数見られる。このよ うな一時刺激性、蓄積障害性の接触皮膚炎の 原因として界面活性剤が考えられてきた。一 方、シャンプー中の界面活性剤による美容師 のアレルギー性接触皮膚炎は、Taniguchi ら 16 、Hashimoto ら 17 、Inoue ら 18 により報告さ れているが、比較的稀である。しかし谷田らず は理・美容師でのパッチテストで、染毛剤成分 と関連物質以外の成分で最も陽性頻度の高 かったのは、界面活性剤成分であるコカミド プロピルベタインであり、その陽性率は48例 中19例(39.6%)であったことを報告している。 これらの陽性例が必ずしもすべてアレルギー 反応ではなく、刺激反応も含んでいる可能性 はあるものの、界面活性剤によるアレルギー 性皮膚炎は美容師以外でも報告されており、 頻用する 理·美容師においては充分注意してい く必要があると考える。

文献

- 荒尾龍喜ほか:職業性皮膚障害についての統計的観察。日災医会誌 1998:46:343-353
- 2) 平松正浩、向井秀樹、加藤博司. 美容師・理 容師の皮膚炎についてのアンケート調査。皮 膚病診療 2000:22:573-578
- 3) 谷田宗男. 理・美容師の職業性接触皮膚炎 第2報。労災疾病等13分野医学研究・開発、普 及事業、2007
- Otsuki T, Koike D, Hashimoto K et al. Skin symptoms related to Occupational contact dermatitis in hairdressers: Questionnaire results. Kawasaki Med J 2001; 7:1-8
- 5) 西岡和恵、理・美容師の皮膚障害. J Environ Dermatol Cutan Allergol 2007; 1:181-188
- Xie Z, Hayakawa R, Sugiura Metal. Occupational contact dermatitis in hairdressers. Environ Dermatol 1998; 5:216-222
- 西岡和恵. パッチテストの実際(アレルギー 反応、刺激反応、オープンテスト、閉鎖貼布試 験). アレルギー 2008:57:1260-1264
- 8) 東 禹彦 染毛剤による接触皮膚炎. 医薬 ジャーナル 2002:38:5-16
- 西岡和恵、ヘアダイによる接触皮膚炎に対する生活指導、皮膚病診療 2008:30:437-440
- 10) 西岡和恵、高旗博昭、徳久弓恵、パラフェニレンジアミンにパッチテスト陽性を示した美容師の職業的予後調査,第35回日本皮膚アレルギー学会総会 第30回日本接触皮膚炎学会総会合同学術大会 プログラム・抄録集2005:163
- Matsunaga K, Hosokawa K, Suzuki M et al. Occupational allergic contact dermatitis in beauticians. Contact Dermatitis 1998; 18: 94-96
- 12) Laing ME, Powell FC, O' Sullivan D et al. The influence of contact dermatitis on career change in hairdressers. Contact Dermatitis 2006; 54: 218-219
- 13) 谷田宗男、蚌 明子、理·美容師の手あれ予防 ガイドブック、独立行政法人 労働者健康福 祉機構 勤労者物理的因子疾患研究センター 編. 仙台:独立行政法人 労働者健康福祉機 構発行、2009
- 14) Nishioka K, Takahata H, Yasuno H, Two cases of contact urticaria syndrome due to oxidative hair dyes, Environ Dermatol 2001:

- 8:88-93
- 15) Edwards EK, Jr, Edwards EK. Contact urticaria and allergic contact dermatitis caused by paraphenylenediamine. Cutis 1984: 34:87-88
- 16) Taniguchi S, Katoh J, Hisa T et al. Shampoo dermatitis due to cocamidopropyl betaine. Contact Dermatitis 1992; 26: 139
- 17) Hashimoto R, Hayakawa R, Kato Y et al, Cocamidopropyl betaine (CAPB) as a cause of shampoo dermatitis. Environ Dermatol 2000: 7:84-90
- 18) Inoue T, Yagami A, Sano A et al. Occupational allergic contact dermatitis resulting from exposure to plural surfactants. J Environ Dermatol Cutan Allergol 2008; 2:182-187

Occupational Contact Dermatitis in Hairdressers and Barbers

Kazue Nishioka

Joy Dermatological Clinic

ABSTRACT

Hairdressers and barbers are faced with the risk for the development of occupational contact dermatitis. Mainly the irritant contact dermatitis is caused by frequent water exposure including shampooing, while the sensitization tends to occur later. The dermatitis begins early in their career, and the incidence increases with the presence of atopic diathesis. Contact dermatitis is classified into irritant and allergic forms. Clinical features of irritant contact dermatitis are comprised of dryness, fissuring and scale, while allergic contact dermatitis is comprised of eczematous appearance such as itchy erythemas and papules. The most common allergens in allergic contact dermatitis are paraphenylenediamine and its related compounds in oxidative hair dyes. Less frequent allergens are thioglycolic acid in permanent wave lotion, metals such as nickel, fragrance and accelerators in rubber gloves. It is important to detect precise allergens using patch tests and educate how to prevent dermatitis. It is difficult for hairdressers and barbers suffered from allergic contact dermatitis to continue their job. It is recommended to give sufficient information on contact dermatitis at an early stage of professional training and to instruct wearing protective gloves and using moisturizing creams.

Keywords: hairdresser, occupational contact dermatitis, contact allergy, paraphenylenediamine, occupational prognosis 原著

職業性皮膚疾患のまとめ

杉浦啓二、杉浦真理子

第一クリニック皮膚科・アレルギー科

抄 録

職業性皮膚疾患については、健康被害者だけでなく医療者側においても、ただ蕁麻疹や湿疹としてとらえる傾向があり、また直接的または間接的に職業や社会に影響を及ぼす場合があるにも関わらず、それ自体が深刻な問題として取り上げられることは少ない。

今回、平成17年1月から平成21年4月までに、当科を受診し、職業性皮膚疾患と診断し、皮膚テストを行った症例を検討した。症例数は23例で、女性に多かった。年齢は20代及び30代に多く、また、職業別では美容師または理容師が最も多く、これはクリニックがオフィス街にあり、工場が近隣にないことも一因と考えた。疾患では、アレルギー性接触皮膚炎が最も多く、発症部位としては両手及び上肢に多く認めた。勤務上、対策をとっている症例は7例で、他の症例については、勤務の都合や周囲の理解が得難いことにより、対策が不十分であった。また、労災申請を行った症例はなかったが、今後、美容師及び理容師の職業性皮膚疾患に対し、労災申請が認められる予定があることから、症例数の増加が考えられる。現在のところ、職業性皮膚疾患として報告されるのは氷山の一角であり、実数はまだ多いものと推測される。そのため職業上の健康被害について、今後、全国的な統一されたシステムを含め、医療及び社会全体での環境整備が必要である。

Key Words: 職業性疾患、職業性皮膚疾患、刺激性皮膚疾患、アレルギー性皮膚疾患、美容師

名古屋市中区栄 2-1-1 日土地ビル 2F 第一クリニック皮膚科・アレルギー科 杉浦啓二

TEL & FAX 052-204-0835

緒言

職業性皮膚疾患については、本邦だけでなく世界的にも報告されていない数を含むと、膨大な症例数になると考えられる。これまでの報告をみると、職業性疾患に占める皮膚疾患の割合は20 - 30%である^{1.2}。職業性皮膚疾

T 460-0008

患について 1983 年の報告³ では、90 - 95% が接触皮膚炎であり、また別の報告では、10 万人の労働者の 50 - 190 人に職業性接触皮膚炎を認めるという報告もある⁴。職業性皮膚疾患については、医学的な側面だけでなく、経済的な観点からも重要な疾患で、この疾患による経済的な損失はかなり大きいと言われている。

方法及び対象

平成17年1月から平成21年4月までに当科を受診し、職業性皮膚疾患と診断した23例(表1)を対象とした。年齢、性別、診断、原因物質、罹患期間、発症部位、対策の有無などについて検討を行った。なお、診断及び発症部位については、複数のことがあり、その場合は個々の診断及び発症部位を一症例とした。

結果

男女比は4:19で女性に多かった。年齢は 20-30歳代に多く、これらの年代で20人(87%) を占めた。全23例の平均年齢は29.43歳で あった (図1)。職業別では美容師及び理容師 に多く、10例(43.5%)であった。皮疹部位に ついて複数部位にわたる症例が9例あり、個々 の部位では、両手又は両上肢が最も多かった (図2)。疾患別では、7例に複数の診断を認め、 疾患別の症例数では、アレルギー性接触皮膚 炎が20 例で最も多かった。刺激性接触皮膚炎 は4例に認め、蕁麻疹は4例、金属アレルギー は3例であった(図3)。原因物質は各々の職場 で用いられるものが多く、中でも美容師、理容 師が多いことから、ゴム手袋やパーマ液によ ること場合が多かった (表1)。平均罹患期間 は46.82ヶ月で、最短期間1ヶ月、最長期間

Table 1 Cases of occupational skin disease

年齡	性别	政業	皮疹部位	验斯	原因物質(製品)	原因物質(物質)
32	F	美容師	両手、駆幹	アレルギー性接触皮膚炎	アロマオイル	cedarwood oil, fragrance mix, laurel oil lemonglass oil, cirmamic oil
65	F	黄容師	商手	アレルギー性接触設備炎、蕁麻疹	ヘアトリートメント	
26	M	パン職人	而手	アレルギー性接触皮膚炎	小麦,ゴム手袋	
24	F	美容師	南手	アレルギー性接触度偏炎	八一マ液	
21	F	美容筋	商年	アレルギー性接触皮膚炎	旋延剂	in aminophenol, oraminophenol praminophenol programic acid, printrond PD, PTD, pyrogaliol, PPD, Paminoazibenzene
18	F	美容師	南手、南上肢	アレルギー性接触皮膚炎	染毛剤、パーマ液	ATG
50	F	パッキング	南手	アレルギー性機能皮膚炎	AE.	
03	F	基盤作成	面手,而上枝	アレルギー性接触皮膚炎、蕁麻疹、金属アレルギー	備着用エタノール液	アルコール、ニッケル、コバルト、スス
21	F	美容符	両手	アレルギー性接触皮膚炎	ゴム手袋(カラーグローブ)	ラデックス
20	F	美容師	南手	アレルギー性接触皮膚炎	ゴム手掛	
10	F	パン胆人	商手、商上铁	アレルギー性接触皮膚炎	小鹿	
27	F	教授師	两手	アレルギー性接触皮膚炎	ゴム手被	ラチックス
26	F	美容師	南丰、南上铁	アレルギー性接触皮膚炎	ヘアダイ、バーマ	
0)	F	看護師	両手,金牌	アレルギー性接触皮膚炎	ゴム手製	
31	F	アロマセラビスト	両手。 面前脑	アレルギー性接触皮膚炎	爱妈	fragrance mix
32	M	スーパー店員	南手	刺激性接触皮质炎、蕁麻疹	ゴマの産、チェシバ、青とうがらし	
25	M	和紙作り	商手	刺激性接触斑膚炎	紙、麻糕	本末群寶
37	F	ネイリスト	南手	刺激性接触皮膚炎	アクリルリキット、トップコート	
35	М	会社員	南手	アレルギー在接触皮膚炎、金属アレルギー	アクタケクール、クリアカット	塩化白金酸、塩化氯二酰。コバルト
24	F	理容师	南手、南上肢、筋幹	アレルギー性接触皮膚炎	ヘアシャンブー	ローアミノフェノール
21	F	美容師	而上舱	アレルギー性接触皮膚炎、刺激性接触皮膚炎	シャンプー、ペアダイ	
22	F	歯科衛生士	商額	アレルギー性接触皮膚炎、金属アレルギー		ニッケル、コバルト
52	E	葬儀セレモニー	動船, 面上肢	アレルギー性接触皮膚炎、蕁麻疹	白菊、ヒヤシンス、緑香、小菊、ゆり、他植物多数	

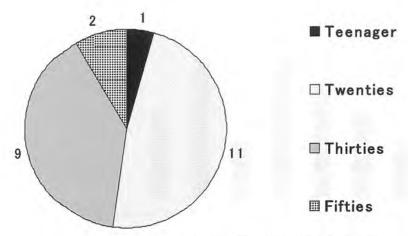


Figure 1 The number of cases in age

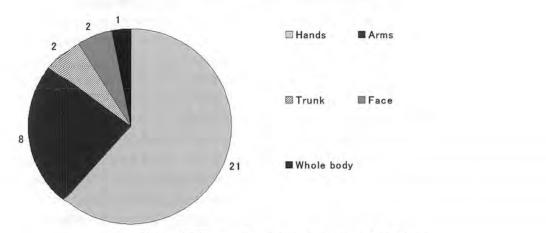


Figure 2 The number of cases in region of skin disease

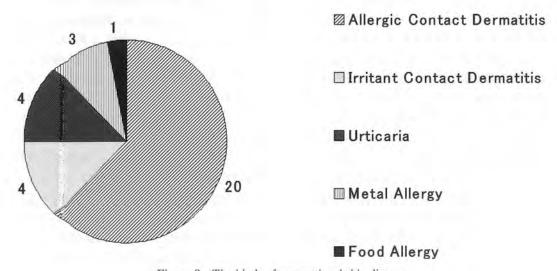


Figure 3 The kinds of occupational skin disease

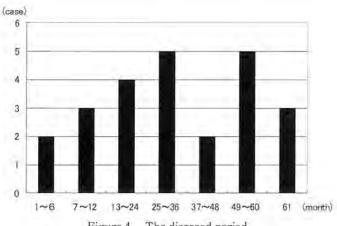


Figure 4 The diseased period

180ヶ月であった(図4)。また、年齢と罹患期間に関係は認めなかった。何らかの対策を講じているのは7例で、これらの症例においても抗原暴露から完全に逃れられる状況ではなかった。

考察及び結論

職業性皮膚疾患は、軽症な健康被害として 捉えられる面があり、被害者自身も病識がな い場合や周囲の理解を得ることが難しいこと がある。また、職業性皮膚疾患については、疾 患特異性もあり診断に苦慮することもある。 職業性皮膚疾患の90-95%が接触皮膚炎で、 その中で70-80%が刺激性接触皮膚炎で20 - 25% がアレルギー性接触皮膚炎であったと いう報告®を勘案すると、職業性皮膚疾患の診 療においては、皮膚疾患について知識を要し、 さらに皮膚テストを行うことができる環境下 での診断が重要である。また、接触蕁麻疹は 職業性皮膚疾患の 0.5 - 8.3% を占めると報告 されている5-100。接触蕁麻疹については4期に 分類され 中、その中で第3期は消化器症状や呼 吸器症状を伴い、第4期はショック症状を伴う もので、生命の危険にさらされる場合があり、 職業性疾患の診療にたずさわる医療従事者だ けでなく、事業所を含む罹患者周囲において も、その疾患に対する認識を深めることが重 要である。

我々の施設での検討結果では、これまでの い。

報告③と異なり、刺激性接触皮膚炎よりもアレ ルギー性接触皮膚炎が多かった。その理由と して、一つはアレルギー性接触皮膚炎と診断 した症例の中には、これまでの治療歴で皮膚 テストを施行しない医療施設で難治性の皮膚 炎として加療されていた症例があること、ま た一方では皮膚テストを行った症例を対象と しているため、まだ皮膚テストを行っていな い症例の中には、今後精査を行った場合、刺激 性接触皮膚炎症例数が増加する可能性がある ことが挙げられる。職業性皮膚疾患について、 就業者が皮膚疾患又はアレルギー疾患を有し ている場合、皮膚疾患に罹患する可能性や皮 膚疾患を悪化させる可能性が高くなる。特に 手湿疹、アトピー性皮膚炎、乾燥肌などは、職 業性接触皮膚炎を生じる危険因子として知ら れている。そのため、就業者の皮膚疾患やア レルギー性疾患を把握し、それによって生じ うる疾患やそれに伴った事象について、対応 や対策を考えておくことは大切である。今後、 美容師及び理容師の職業性皮膚疾患に対して 労災の申請が認められることや職業性皮膚疾 患の啓蒙活動により認識が深まることより、 職業性皮膚疾患症例数が増加すると考えられ る。そのため産業医や他科の医療従事者との 連携が重要であり、職業上の健康被害につい て、さらなる検討がなされることを期待した

職業性皮膚疾患は医学的な観点においての みだけでなく、社会的、経済的にも重要で、こ れまでの報告。では診療にかかる費用だけでな く、休業補償費や再教育にかかる費用さらに は生産性の損失など、経済的にかなりの負担 がかかることがわかっている。UKでの報告12 では、職業性接触皮膚炎について、罹患者の生 活にかなり大きな影響があり、職種の変更や 失職に及ぶことがあるだけでなく、UKの産業 界においては一年で2億ポンドの損失がある としている。また、ドイツでは患者一人当た りの再教育にかかる費用として5万から10万 ユーロかかり、さらに間接的な費用は医療費 用の6倍以上かかるとしている®。このような ことから本邦においても医療費以外の間接的 な費用が、諸外国と同様に生じていると考え られ、医療費の増大の一因と推測される。職 業性皮膚疾患を呈することが多い職業の美容 師、理容師、パン屋、金属加工業者、電気事業 者、医療従事者などの職業は専門性が高く、生 産性を生み出すようになるには、かなりの時 間と費用がかかっている。そのため、就業者 個々における職業への思いは強く、皮膚疾患 に罹患していても治療を受けながら就業して いることが多い。我々の施設においても、治 療しながら仕事を続けている場合が多い。そ の理由として、30代以降になると転職や再就 職は、家庭及び事業所の事情、昨今の世界的な 経済状況などより困難な場合が多いことが挙 げられる。そのため同じ職場において抗原暴 露時間の短縮や抗原暴露機会の減少に努めて いるのが現状である。たとえ同じ事業所内で の配置転換を行う場合でも、再教育に関わる 費用や一時的な生産性の低下が生じることか ら、間接的な費用がかかってくる。職業性皮 膚疾患は、職業に関連する健康被害の中で頻 度の高いものの一つであるため、社会に及ぼ す影響は大きい。そのため医療界だけでなく 業界を巻き込んだ予防的な観点からも職業性 皮膚疾患への対応が必要であり、そのために

も全国的な統一されたシステムの整備が必要 である。

文献

- Cherry NM, Meyer JD. Holt DL, et al. Surveillance of work-related diseases by occupational physicians in the UK: OPRA 1996-1999. Occup Med (Lond) 2000; 50: 496-503.
- Diepgen TL, Kanerva L. Occupational skin diseases. Eur J Dermatol. 2006; 16: 324-30.
- Keil JE, Shmunes E. The epidemiology of work-related skin disease in South Carolina. Arch Dermatol. 1983 Aug;119 (8): 650-4.
- Diepgen TL, CoenraadsPJ. The epidemiology of occupational contact dermatitis. Int Arch Occup Environ Health. 1999 Nov; 72 (8):496-506.
- Kwiterovich KA, Maguire MG, Murphy RP, et al. Frequency of adverse systemic reactions after fluorescein angiography. Results of a prospective study. Ophthalmology. 1991; 98: 1139-42.
- Knowles SR, Weber EA, Berbrayer CS. Allergic reaction to fluorescein dye; successful one-day desensitization. Can J Ophthalmol. 2007; 42: 329-30.
- Williams JD, Lee AY, Matheson MC, et al. Occupational contact urticaria: Australian data. Br J Dermatol. 2008; 159: 125-31.
- English JS. Occupational dermatoses: overview.
 Occup Med (Lond). 2004;54:439-40.
- Lira RP, Oliveira CL, Marques MV, et al. Adverse reactions of fluorescein angiography: a prospective study. Arq Bras Oftalmol. 2007; 70:615-8.
- Knowles SR, Weber EA, Berbrayer CS. Allergic reaction to fluorescein dye: successful one-day desensitization. Can J Ophthalmol. 2007; 42: 329-30.
- 11) Smita A, Howard I Maibach. Contact Urticaria Syndrome(Introduction). In: Contact Urticaria Syndrome(Smita A, Arto L, Howard I Maibach, eds), New York: CRC Press LLC, 1997; 1-3.
- Kanerva L, Elsner P, Wahlberg JE, et al. Handbook of Occupational Dermatology. Berlin: Springer, 2000.

The study of occupational skin disease

Keiji Sugiura, Mariko Sugiura

Department of Environmental Dermatology and Allergology, Daiichi Clinic

Abstract

Background: Not only patients but also physicians sometimes confuse occupational skin diseases for eczema or urticaria. These skin disorders are often directly or indirectly caused by issues in the workplace. However these skin disorders are sometimes not dealt with as serious issues. Materials and methods: In this study, we showed some cases of occupational skin disease that were treated in our clinic from Jan., 2005 to April, 2009. Results: The number of patients was twenty-three cases, and most of these were female. Because our clinic is located on a street with offices and not near factories, the most common occupation was hair dresser and most of patients were in their 20s or 30s. The frequently occurring disease was allergic contact dermatitis. Occupational skin diseases most often occurred on the hands and arms. Seven of the cases used counter measures against occupational skin diseases, but other cases did not take any precautions because co-workers poorly understood their disease. Discussion and conclusion: In the future, as more people become aware of occupational skin diseases, the number of these cases could increase. The number of reported cases of the diseases was only the tip of iceberg; the real number is likely bigger. In order to improve the circumstances of protect against occupational diseases, not only the medical community but also the government must work together to create a national system to promote healthy workplaces.

Keywords: occupational disease, occupational skin disease, irritant skin disease, allergic skin disease, hair dresser 原著

抗喘息薬による気管支喘息患者の ヘリウム・フローボリューム曲線の変化

磯谷澄都、多田利彦、三重野ゆうき、井水ひろみ、小橋保夫、加藤 敦、 米田有希子、清水秀康、星野多美、内山康裕、竹内保雄、戸谷嘉孝、 齊藤雄二、佐々木文彦、岡澤光芝、榊原博樹

藤田保健衛生大学呼吸器内科・アレルギー科

抄 録

気管支喘息患者の末梢気道に対する各種抗喘息薬の効果を Helium-flow-volume curve (He-FV) を用いて検討した。Stepl ~ 4の気管支喘息患者 20名を対象に、プロカテロール錠、徐放性テオフィリン薬、モンテルカスト錠、サルメテロール吸入剤を単回投与し、投与前、投与 60 分後、120 分後 にHe-FV を測定した。FEV₁はプロカテロール錠、サルメテロール吸入剤の投与後に有意に上昇した。一方 isoflow volume (Viso $\dot{\mathbf{v}}$) は、サルメテロール吸入で変化はなく、内服薬の3剤で有意な改善が認められ、末梢気道に対する薬剤効果は投与経路により異なることが示唆された。

緒言

近年、気管支喘息における末梢気道病変が 注目されている。喘息患者の手術切除肺での 検討では末梢気道において中枢気道に較べて 好酸球が増加していることが報告され¹⁾、また 夜間喘息患者で肺胞中の好酸球が夜間に増加 するなど末梢気道病変の重要性を示す報告が 蓄積されている。

薬物治療の末梢気道への影響について、近 年吸入ステロイドが基本的な長期管理薬とし て確立されているが、吸入剤、特にドライバウ ダー製剤の問題点として薬剤がどの程度末梢 気道へ到達するのかという点があり、また好 酸球は粘膜側より漿膜側に多いという報告も ある³⁰。一方、内服の抗喘息薬は、血流により 末梢気道へも到達が可能と推察される。

喘息治療薬の末梢気道における効果の評価 は難しいが、末梢気道病変を反映する指標と して呼吸機能検査では closing volume、 Helium-flow-volume curve (He-FV)、 \dot{V}_{50} 、 \dot{V}_{25} などがあり、近年では誘発喀痰による末梢気

〒 470-1 192 愛知県豊明市沓掛町田楽ケ窪 1-98 磯谷澄都

藤田保健衛生大学呼吸器内科・アレルギー科

TEL 0562-93-9241 FAX 0562-93-3576 道の炎症病変の評価を試みる報告 もみられ

He-FV は測定方法、対象患者の選択などに より測定値が異なる可能性があるが、一定の 測定方法で同一患者の末梢気道を評価するこ とは可能と考えられる。しかしながら最近の 喘息治療薬について He-FV による効果検討の 報告は無い。

本研究では各種抗喘息薬の単回投与の効果 を、He-FV を用いて検討した。

対象及び方法

当院通院中の stepl ~ 4 の気管支喘息患者 で、男性13名、女性7名 (平均年齢47.0歳)。 試験前日の朝より定期薬の内服・吸入とも中 止とし、経口Ba刺激薬のプロカテロール錠 (50 µg)、徐放性テオフィリン製剤 (200mg)、 ロイコトリエン受容体拮抗薬のモンテルカス ト錠 (10mg)、長時間作動性吸入 B。刺激薬の サルメテロール吸入剤 (50 ug) をそれぞれ内 服あるいは吸入し、投与前(内服または吸入 前)、投与 60 分後、120 分後に He-FV を測定 した。なお、一部の患者では複数の薬剤の試 験を施行した。その際は試験間隔を1週間以 上開けた。

He-FV の測定は、まず通常の方法で空気呼 吸下の Flow-volume curve (以下 FV と略す) を画かせた後、80%He と 20%O。の混合気を最 大呼気位から最大吸気位まで3回繰り返して 吸入させ、He-FV を画かせた (3 回肺活量法)。

FV の評価には、努力性肺活量 (FVC)、1 秒 量 (FEV₁₀)、1 秒率 (FEV₁₀%) 1 秒量の予測 正常値に対する% (%FEV₁₀)、最大中間呼気流 速 (MMF)、ピークフロー (PF)、50% VC に おける呼気流速 (V 50)、25% VC における呼 気流速 (V25)、V50/V25を用いた。

He-FV の評価には等流速呼出量 (isoflow volume: VisoV), 50% VC における呼気流速 の増加率 (△ V₂₀)、25% VC における呼気流速 の増加率(△ V ₺)を用いた。各指標の計測方 法および計算方法は図1に示す。

結果

患者背景を(表1)に示した。年齢に関して は各薬剤負荷群の間で有意な差は認めなかっ た。FVC、%FEV、メサコリン気道過敏性は

∞ 100

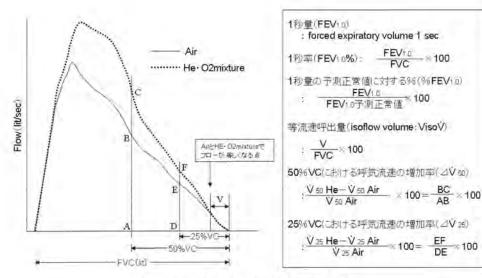


図1 ヘリウム・フローボリューム曲線

各群間で有意な差を認めなかったが、FEV.% に関してはプロカテロール内服群において、サルメテロール吸入群、テオフィリン内服群と比し有意に高値であった。またプロカテロール内服群の重症度は、テオフィリン内服群、モンテルカスト内服群と比し有意に軽症であった。プロカテロール内服群において発作時の短時間作動性 B。刺激薬吸入のみで発作

予防薬を使用しない患者が4名存在した。

プロカテロールに関しては、FEV, が前値 2.94±1.13L が 120 分値 3.05±1.16L (P<0.05、表 2-1) と有意に改善した。60 分値では有意な改善はみられなかった (表 2-1)。 Viso Vに関しては、前値 24.5±15.6%が 60 分値 10.9±9.6%、120 分値 10.8±9.7% と何れも有意に減少した (P<0.01、表 2-1、図 2-1)

表1 患者背景

	Procaterol tablet In=11)	Sustained-release Theophylline (n=7)	Montelukast (n=8)	Salmeterol (n=6)
性別 (M/F)	6/5	5/2	5/3	5/1
希 前	42.1 (17.2)	54.1 (12.8)	49,3 (15,8)	52 (20.2)
FVC	3.70 (1,24)	3.34 (1.23)	3.28 (1.01)	3.55 (1,18)
%FEV1	95,6 (15.1)	51.9 (23.4)	81.4 (16.0)	77.3 (22.5)
FEV1%	77.5 (9.6) 111	66,6 (10.1)	69.8 (11.8)	62.6 (14.1)
ogMch-PC20	2,73 (0.63)	2.45 (0,61)	2,60 (0,45)	2.21 (0.66)
step	1:8, 11:0, * III:1, IV :2	151. II 1. III:1. IV:4	1:1, II 1. III:2. IV:4	1:1, H:1, H:1, IV 3
drugs	T:2, L:3, IS 6, IB:1 None:4	T;5, L:5; IS:7; IB:2	T:4, L:6, IS:8, (B:2	T:5 L:2 OS:1 IS:4, IB:1

T Theophylline術放棄 L LT搭抗薬 IS 吸入ステロイド薬 OS 経口ステロイド薬 IB 吸入る2別放棄 ※p<0.05 | Salmeterol, Theophyllineと比較して +p<0.05 Theophylline, Montelukastと比較して

表2-1 肺機能の時間経過: Procaterol tablet投与時 表2-2

	pre	60 (min)	120 (min)
FVC (L)	3.73 (1.24)	3.67 (1.22)	3.72 (1.22)
FEVI (L)	2.94 (1.13)	2.95 (1.13)	3.05 (1.16)
FEV1 (%)	77.5 (9.6)	76,4 (11.5)	80.4 (11.0)
MMF (Us)	3.13 (1.69)	3.36 (1.83)	3.54 (1.90)
PF (Lis)	7.98 (2.90)	7.79 (2.56)	8.35 (2.79)
V50 (Lis)	3.07 (1.75)	3.32 (1.94)	3.50 (2.01)
V25 (L/s)	1,25 (0.81)	1.30 (0.87)	1.44 (0.96)
V50/V25	1,25 (1.00)	1.30 (1.27)	1.44 (1.16)
₫V50 (%)	36,6 (25.9)	33.3 (20.2)	35.5 (18.8)
△V25 (%)	26.3 (19.4)	33.0 (42.2)	20.0 (36.9)
VisoV(%)	24.5 (15.6)	10.9 (9.6)#	10.8 (9.7)#

表2-3 肺機能の時間経過: Montelukast投与時

	pre	60 (min)	120 (min)
FVC (L)	3,28 (1.01)	3.26 (0.97)	3.30 (0.97)
FEV1 (L)	2,31 (0.84)	2.33 (0.88)	2,37 (0.83)
FEV1 (%)	69.8 (11.6)	69.6 (11.1)	71.1 (11.6)
MMF (Lis)	2.07 (0.94)	2.01 (0.93)	2.15 (0.95)
PF (L/s)	6.59 (0.94)	6,51 (0.93)	6.66 (0.95)
V50 (L/s)	1.95 (1.01)	1,91 (1,00)	2.01 (0.98)
V25 (LIs)	0.66 (0.43)	0.67 (0.43)	0.72 (0.46)
V50/V25	3.29 (0.81)	3.19 (0.74)	3.35 (1.10)
∠1V50 (%)	15.5 (14.4)	24.8 (21.6)	14.2 (14.0)
∠1V25 (%)	- 1.27 (10.81)	3.13 (17.58)	5.49 (11.20)
VisoV (%)	39.2 (16.92)	26.6 (8.88)#	14.8 (4.67)**

w p<0.01:preと比らして

Mean (S.D.)

表2-2 肺機能の時間経過: Sustained-release Theophylline投与時

	pre	60 (min)	120 (min)
FVC(L)	3.34 (1.23)	3.36 (1.21)	3.36 (1.16)
FEV1 (L)	2.25 (0.95)	2.30 (1.00)	2.34 (0.97)
FEV1 (%)	66.6 (10.1)	67.3 (12.2)	68.8 (11.3)
MMF (Lis)	1.86 (0.95)	1.98 (1.05)	2.11 (1.04)
PF (Lis)	6.47 (2.09)	6.60 (2.10)	6.64 (2.00)
V50 (L/s)	1.71 (0.88)	1.88 (1.09)	1.99 (1.09)
Ú25 (L/s)	0.51 (0.31)	0.57 (0.37)	0.60 (0.39)
V50/V25	3.53 (0.79)	3.47 (0.94)	3,57 (0.63)
∠1V50 (%)	17.6 (14.8)	23.3 (5.9)	12.9 (12.6)
∠IV25 (%)	4.78 (13.9)	12.3 (11.3)	- 0.3 (12.0)
VisoV(%)	36.5 (18.9)	18.7 (5.1)	12.6 (4.0)#

◎ p<0.05, # p<0.01) preと比較して

Mean (S.D.)

表2-4 肺機能の時間経過:Salmeterol投与時

	pre	60 (min)	120 (min)
FVC (L)	3.55 (1.16)	3.71 (0.96)	3.76 (0.92)
FEV1(L)	2.30 (1.06)	2.60 (0.92) *	2.66 (0.89) *
FEV1 (%)	62.8 (14.1)	69.1 (13.9)	70.1 (14.9)
MMF (Lis)	1.72 (1.19)	2.22 (1.24)	2,30 (1,24)
PF (L/s)	5.58 (2.26)	6.70 (2.23)	7.19 (2.27)
V50 (LIS)	1.68 (1.21)	2.21 (1.36)	2.21 (1.35)
V25 (L/s)	0.62 (0.55)	0.75 (0.67)	0.83 (0.72)
V50/V25	3,23 (0,80)	3.67 (1.08)	3.39 (1.09)
△V50 (%)	16.5 (9.5)	18.3 (12.9)	23.6 (9.9)
△V25 (%)	7.3 (14.3)	15.1 (11.3)	2.8 (11.9)
VisoV (%)	23.6 (11.7)	19.4 (9.7)	18.3 (8.4)

p<0.01:pre \ HRL T

Mean (S.D.)

時間経過で有意な変化を認めた指標は FEV, isoflow volume (以下 Visov と略す) のみであった。

徐放性テオフィリン製剤に関しては、FEVi に変化がみられなかったが、VisoVが前値 36.5±18.9%、60 分値 18.7±5.1%、120 分値 12.6±4.0%と有意に減少した (P<0.01、表 2-2、 図 2-2)。

モンテルカストに関しても FEV, に変化がみられなかったが、 Viso \dot{V} が前値 $39.2 \pm 16.9\%$ 、 60 分値 $26.6 \pm 8.9\%$ 、 120 分値 $14.8 \pm 4.7\%$ と有意に減少した(P<0.01、表 2-3、図 2-3)。

サルメテロールに関しては FEV₁ が前値 2.30 ± 1.06 L が 60 分値 2.60 ± 0.92 L、120 分値 2.66 ± 0.89 L (P<0.01、表 2-4) と有意に改善したにもかかわらず、Viso \dot{V} には有意な変化がみられなかった(表 2-4)。

また何れの薬剤に関しても△ V 50、△ V 25 を含めて、その他の呼吸機能の検査項目には 有意な変化は認められなかった。

以上のようにFEV。の改善はプロカテロール とサルメテロールに認められ、Viso Vの減少は サルメテロールでは認められず、経口薬では 全ての薬剤に認められた。

考察

末梢気道とは第7~8分岐以降で、気道径が2mm未満の部位を指す。気管支喘息は慢性閉塞性肺疾患(Chronic Obstructive Pulmonary Disease: COPD)とならんで中枢から末梢気道にかけての病変であり、近年、病理学的検討などから喘息における末梢気道病変の重要性が認識されてきている。

末梢気道病変の評価としては、直接的な評価法として気管支肺胞洗浄 (bronchoalveolar

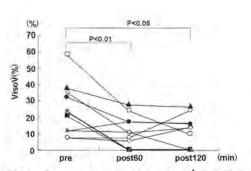


図2-1 Procaterol tablet によるVisoV変化率 (%)

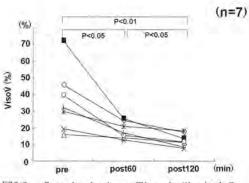


図2-2 Sustained-release Theophyllineによる VisoV変化率 (%)

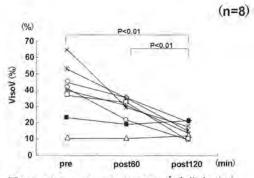


図2-3 MontelukastによるVisoV変化率(%)

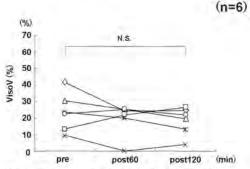


図2-4 SalmeterolによるVisoV変化率 (%)

末梢気道の状態が評価できるといわれるVisoVは、内服薬のプロカテロール群、テオフィリン群、モンテルカスト群で有意な改善が認められた。

lavage)、経気管支鏡下肺生検(transbronchial lung biopsy)があり、直接炎症細胞の種類や病理学的評価ができるが、侵襲が極めて強いのが難点である。間接的評価法として、呼吸機能検査、誘発喀痰検査、CTによる評価などが挙げられる。誘発喀痰検査は侵襲が低く反復が可能な所が利点である。呼吸機能検査も侵襲は低いが、好酸球性炎症をどこまで評価できるのか不明な点が欠点である。

今回は吸入ステロイドに追加あるいは併用される、気管支拡張作用を持つ喘息治療薬の呼吸機能および He-FV への効果を検討した。ヘリウムはその特性によって気体の流れが乱流の large airway においては通常の空気よりも流量 (Flow) が大きく出るが、気体の流れが層流の small airway ではヘリウムの特性は効かなくなる。このため He-FV と通常の FV は下降脚で重なり、この重なった位置の肺気量である VisoV は末梢気道に病変があると大きな値をとるとされている。

He-FV の問題点として患者毎のパラツキが多いことの、測定方法、対象患者の選択などにより測定値が異なる可能性等が指摘されているで。こうした点から He-FV は臨床の場で用いられることは少ないが、今回の我々の検討のように一定の測定方法により同一の患者における He-FV の変化を評価することは可能と考えられる。

検討した結果、FEV」についてはプロカテロール内服、サルメテロール吸入では投与前と比較し投与後有意な上昇が認められた。テオフィリン内服、モンテルカスト内服ではFEV」は経時的に改善傾向を示したものの有意な変化ではなかった。一方、VisoVは吸入のサルメテロールで変化はなく、内服の3剤で投与前と比較し、投与60分後、120分後と経時的に有意な改善を認めた。

既報では比較的中枢側の気道閉塞の指標と されるFEV_iを用いて薬剤の効果をみた報告^{8→} は多いが、末梢気道を反映するとされる呼吸 機能を用いた評価は少ない。 \dot{V} 50、 \dot{V} 25 について短期間での評価が散見される程度 $^{15-20}$ であり、 \dot{V} Viso \dot{V} については調べた限り報告を見出せなかった。

今回の検討ではプロカテロール経口、サルメテロール吸入の両者ともFEV。を有意に改善したが、VisoVに関してはプロカテロール経口のみに改善が認められた。吸入ステロイドに追加投与されるβ。刺激薬としては、主として副作用の点から経口薬よりもサルメテロールのような長時間作動性の吸入薬が使用されることが多い。しかしながらサルメテロールはドライパウダーで粒子が大きく、末梢気道については薬剤が到達しにくく効果が少ないという可能性が考えられる。一方プロカテロール内服は今回の結果から中枢気道だけでなく末梢気道にも作用する可能性が示唆された。

また気管支拡張作用があるとされる徐放性テオフィリン製剤、およびロイコトリエン受容体拮抗薬に関しては今回の検討ではFEV。の有意な改善は認められないにもかかわらず、Visovの改善が認められた。これらの薬剤について今まで末梢気道への効果の検討は余りされていなかったが、いずれも喘息患者の気道における好酸球数の減少などの抗炎症作用が報告されており、末梢気道においてもこの作用が発揮されている可能性が考えられる。また、末梢気道拡張作用という生理的な効果もあるかもしれない。

今後、これらの喘息治療薬の末梢気道への デリバリーや薬理作用の違いが治療効果にも たらす影響について、更なる検討が望まれる。

文献

- Hamid Q, Song Y. Kotsimbos T, et al.: Respiratory pathophysiologic responses -Inflammation of small airways in asthma. J Allergy Clin Immunol. 100 (1): 44-51, 1997
- Kraft M, Martin RJ, Wilson S. et al.: Lymphocyte and Eosinophil Influx into Alveolar Tissue in Nocturnal Asthma. Am J

- Respir Crit Care Med. 159: 228-234, 1999
- 新実彰男:喘息における末梢気道病変病態生理と治療. Progress in Medicine 27 (2):483-491,2007
- 4) 久米裕昭:成人について喘息における末梢気 道病変の治療β₂刺激薬、アレルギー・免疫12 (11):1540-1546,2005
- 星野誠:気管支喘息における末梢気道病変.
 呼吸器科7(3):202-206,2005
- 6) 梅田博道、榊原博樹、釈迦戸晃、他:学童の 肺機能、特にヘリウム・フローボリウム曲線の 検討。藤田学園医学会誌 9(2):351-355, 1985
- 7) 鰐部伸也、進士鶴夫:健常成人男子のヘリウム・フロー・ボリウム曲線. 社会保険医学雑誌 25:48-51,1986
- 8) 柏木秀雄、真田修、高橋良太、他:塩酸プロカテロールの気管支喘息症例の換気機能におよぼす影響。臨床と研究60(5):1643-1651,1983
- Gongora HC, Wisniewski AFZ. Tattersfield AE: A single-dose comparison of inhaled albuterol and two formulations of salmeteol on airway reactivity in asthmatic subjects. Am Rev Respir Dis. 144:626-629, 1991
- 10) 佐々木孝夫、引田亨、松本行雄、他:慢性閉 塞性肺疾患に対するメプチンミニ錠の連用試 験成績. 現代医療 20: 1310-1319, 1988
- 11) Evans DJ, Taylor DA, Zetterstrom O, et al.: A comparison of low-dose inhaled budesonide plus theophylline and high-dose inhaled budesonide for moderate asthma. N Engl J Med. 337 (20): 1412-1418, 1997
- 12) Vatrella A, Ponticiello A, Pelaia G, et al.: Bronchodilating effects of salmeterol, theophylline and their combination in patients with moderate to severe asthma. Pulm Pharmacol Ther. 18:89-92, 2005
- Noonan MJ, Chervinsky P, Brandon M, et al.: Montelukast, a potent leukotriene receptor

- antagonist, causes dose-related improvements in chronic asthma. Eur Respir J. 11: 1232-1239, 1998
- 14) Dockhorn RJ, Baumgartner RA, Leff JA,et al.: Comparison of the effects of intravenous and oral montelukast on airway function: a double blind, placebo controlled, three period, crossover study in asthmatic patients. Thorax, 55: 260-265, 2000
- 15) 崎山幸雄:プロカテロールドライシロップ単 回投与後の呼吸機能の推移、アレルギー・免 疫13(7):1046-1050,2006
- 16) 柏木秀雄、真田修、高橋良太ほか:塩酸プロカテロールの気管支喘息症例の換気機能におよぼす影響―頓用によるメタプロテレノールとの比較試験―、臨床と研究60(5):1643-1651,1983
- 17) 渡辺郁世、前原康宏、田原直樹ほか:ツロブ テロールテープの麻酔前投薬としての有用性 一閉塞性換気障害患者への単回投与による呼 吸機能の改善効果―、臨床麻酔 25 (7):1083-1087,2001
- 18) Pollock J. Kiechel F. Cooper D. et al: Relationship of Serum Theophylline Concentration to Inhibition of Exercise-Induced Bronchospasm and Comparison With Cromolyn. Pediatrics 60 (6): 840-844, 1977
- 19) Sakamoto Y, Kabe J, Horai Y: Effect of the ophylline on improvement of the pulmonary function in the treatment of acute episodes of asthma: the influence of the severity of acute asthma. Ann Allergy 63(1): 21-27, 1989
- 20) 大林浩幸: 吸入ステロイド使用高齢喘息患者 におけるプランルカスト (オノン) 投与によ る末梢気道好酸球性炎症改善効果. 新薬と臨 床 54 (8): 1010-1017, 2005

Change in helium-flow-volume curve by anti-asthmatic agents in bronchial asthma patients.

Sumito Isogai, Toshihiko Tada, Yuhki Mieno, Hiromi Imizu, Yasuo Kohashi, Atsushi Katoh, Yukiko Yoneda, Hideyasu Shimizu, Tami Hosino, Yasuhiro Uchiyama, Yasuo Takeuchi, Masamichi Hayashi, Yoshitaka Totani, Yuji Saitoh, Fumihiko Sasaki, Mitsushi Okazawa, Hiroki Sakakibara

Fujita Health University School of Medicine Division of Respirology and Allergology

Abstract

We examined the effect of the asthmatic drugs on small airway reversibility using Helium-flow-volume curve (He-FV) .

Measurement were repeated before,60 and 120 minutes after taking either a procaterol tablet,a long acting theophylline,a montelkast tablet or single inahalation of salmeterol.

Isoflow volume (VisoV) significantly changed after taking oral medicines, but did not changed by salmeterol inahalation.

These difference could be due to differed administration route.

Keywords: bronchial asthma, small airway, Helium-flow-volume curve, isoflow volume (VisoV)

原著

スギ花粉症合併喘息におけるスギ花粉飛散時期の鼻炎 および喘息症状増悪に対するプランルカストと フェキソフェナシンの効果の比較検討

渡邉直人20、星野 誠30、中川武正4、宮澤輝臣11

- 1) 聖マリアンナ医科大学呼吸器・感染症内科
 - 2) 城西国際大学薬学部薬理学講座
- 3) 国際福祉大学熱海病院呼吸器内科
 - 4) 白浜町国民健康保険直営川添診療所

抄 録

通院中の気管支喘息患者でスギ花粉症を合併している35名を、プランルカストを前投与したP群22名とフェキソフェナシンを前投与したF群13名に分けて、喘息症状増悪・花粉症症状抑制効果を比較検討した。

スギ花粉飛散時期にプランルカスト 450mg/ 日またはフェキソフェナシン 120mg/ 日の前投与を行い、鼻炎症状を追加した喘息日誌を記載してもらい、投薬 6 週間の前後で喘息日誌より症状を点数化し、肺機能検査結果と合わせて評価した。

結果は、スギ花粉症による鼻炎症状はP群において2.78点から1.98点への減少が認められたが、 F群においては3.39点から3.39点へと変化がなかった。

また、事前のアンケート調査により過去3年以内のスギ花粉飛散時期に喘息症状が悪化した症例は27名(P群17名、F群10名)存在した。P群においては喘息状態の悪化は認められなかったが、F群は1.8点から2.0点へと喘息点数の若干の上昇を示し、3名に悪化が認められた。

スギ花粉症合併喘息において花粉飛散時期にロイコトリエン受容体拮抗薬を前投与することは喘息症状の増悪抑制および花粉症症状の軽快に有効であることが示唆された。また、その効果はヒスタミン H1 拮抗薬より有用であると考えられる。

〒 283-8555 千葉県東金市求名 1 番地 城西国際大学薬学部薬理学講座 渡邊 直人 TEL&FAX 0475-53-4590 e-mail drnaotow@jiu.ac.jp

緒言

One airway, One disease は 1997 年 に Grossman¹ によって提唱され、上気道から下 気道までを 1 つのアレルギー疾患として捉え、アレルギー性鼻炎と気管支喘息(以下、喘息)は密接に関係しているとする近年の注目され

ている話題の1つである。

実際に、喘息患者の77.3%にアレルギー性鼻炎を合併し、63.4%に花粉症を合併していたとする報告²¹ がある。また、奥田³¹ は喘息患者にアレルギー性鼻炎を合併する率は、成人で59.4%、小児で75.0%と報告している。2006年度に東北地方で行われた調査⁴¹によると成人喘息患者のアレルギー性鼻炎診断率は68.2%で、アレルギー性鼻炎患者の喘息診断率は34.8%であった。

上野らっは、花粉症合併喘息の35%が花粉飛散時期に症状悪化することを述べている。 我々の調査でも、スギ花粉症合併喘息において、スギ花粉飛散時期に喘息症状が悪化する症例の割合が約30%に認められた。また、季節性鼻アレルギー患者のシーズン終了後に約3割の患者でメサコリンによる気道過敏性が亢進した報告であることから、花粉症が喘息状態を悪化させる要因になる場合がある。

今回我々は、世界初のLTRAとして、本邦

で開発されたプランルカストに注目し、スギ 花粉症を合併している喘息患者にプランルカ ストあるいはフェキソフェナシンを前投与し、 喘息症状増悪防止および花粉症症状抑制効果 を比較検討したので報告する。

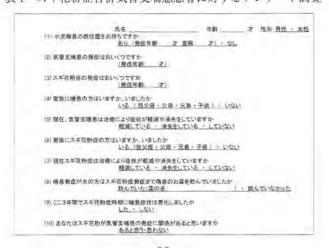
対象

通院中の喘息患者でスギ花粉症を合併している 35 名を、プランルカストを前投与した P群 22 名(男性 11 名/女性 11 名、平均年齢 46.6歳 (29~70歳)、重症度:Step1=2、Step2=10、Step3=10、Step4=1、平均 IgE 373 U/ml (22~830 U/ml)、スギ単独陽性者 6 名、平均吸入ステロイド量 (BDP 換算) 1000 μg (800~1600 μg)]とフェキソフェナシンを前投与したF群 13 名(男性 7 名/女性 6 名、平均年齢 47.2歳 (22~70歳)、重症度:Step1=5、Step2=4、Step3=3、Step4=1、平均 IgE 340 U/ml (22~740 U/ml)、スギ単独陽性者 4 名、平均吸入ステロイド量 (BDP 換算) 1000 μg (800~1600 μg)〕に分けた。

方法

まず初めに、対象患者に事前のアンケート 調査(表1)を行い、過去3年間のスギ花粉飛 散時期に喘息が増悪した既往の有無を確認し た。P群22名中17名が、F群13名中10名が

表1 スギ花粉症合併気管支喘息患者に対するアンケート調査



増悪した印象を持っていた。

スギ花粉飛散時期にプランルカスト(オノン^R) 450mg/ 日あるいは塩酸フェキソフェナジン

(アレグラ[®]) 120mg/日の前投与を行い、鼻炎 点数の症状項目を追加した喘息日誌(表 2)を 記載してもらった。

表2 鼻炎症状·喘息症状日誌

表3 鼻症状重症度分類

	口(しゃみの回数		4点21回以上 3点20~11回 2点:10~6回 1点5~1回 0点:0回 4点21回以上 3点:20~11回 2点:10~6回 1点:5~1回 0点:0回				
ロ 鼻をかんだ回数		回数					
L			2点鼻づまりが 1点:ロ呼吸は1 0点:鼻づまりが	とくないが異っ			
			1000	NAME OF TAXABLE PARTY.	No.		
程度お。			(Lp)	*発作また	は泉瀬		最重症=4点
程度お。 症!		+111	(L+)	発作また	は鼻漏	-	
		-	+++	#発作また 	は鼻漏 	最重症	最重症=4点 重症=3点
		最重新		+++	+	最重症	
				最重症	最重症	Charles and the last	重症=3点 中等症=2点
症		最重		最重症 重症	最重症 重症	重症	重症=3点

表4 喘息症状重症度分類

	現在の治療ステップ			
現在の治療における患者の症状	ステップ1	ステップ	ステップミ	ステップ4
ステップ1 軽空間欠型相当 症状が適り回来等 症状が適り回来等 症状は軽度で短い 夜間症状は月に1~2回	校定間次型	经定转转型	中等症持续型	重定接缺型
・ステップ2 軽度持続型相当 ・受軟は週1回以上、しかし、毎日はない ・月1回以上日常生活や曖昧が妨げられる ・夜間を状が月2回以上	经支持基础	中等压抑线型	建设扬缺型	重定持续型
ステップ3・中等変得終整相当 ・変状が毎日表示 短時間作用性吸入方2割削重がほとんど毎日 ・適1度以上日本生活や理解が妨げられる ・変物を状か速1度以上	中等互相思想	生症持续型	生症持続型	重定持续型
ステップ4 重度核純製相当 ・消磨下でもしばしば変れ悪化 ・変状が毎日 ・日本生活に制限 ・しばしばを制度状	無定持結繁	重度将基型	重定桥映型	杂重应持续

投与6週間の前後で改訂した喘息日誌より 症状を鼻症状重症度分類 (表3) および喘息重 症度分類 (表 4) を参照に点数化し、喘息発作 点数と鼻炎症状点数の推移で評価した。また、 過去3年以内に喘息症状増悪の既往がある患 者に対しては肺機能検査結果と合わせて評価 した。

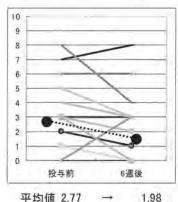
調査期間中の服薬状況は一定とし、花粉症 症状増悪時には局所点鼻薬、点眼薬の屯用の みで対処した。

本臨床研究は、ヘルシンキ宣言を遵守して 遂行され、聖マリアンナ医科大学倫理委員会、 大和市立病院倫理委員会および佐々木病院倫 理委員会の承認を得ている。

結果

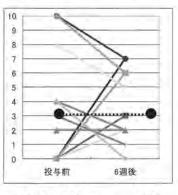
スギ花粉症による鼻炎症状はP群において 2.78 点から 1.98 点へ減少が認められたが、F群 においては3.39点から3.39点へと変化がな かった (図1)。

プランルカスト群(n=22)



平均値 2.77 →

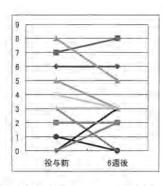
フェキソフェナジン群(n=13)



平均値 3.39 → 3.39

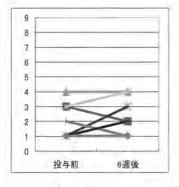
図1 鼻炎症状点数推移。鼻炎症状に対するプランルカストとフェキソフェナシンの比較では、プランル カスト前投与の方が有効であった。

プランルカスト群(n=17)



平均値 1.29 → 1.18

フェキソフェナジン群 (n=10)



平均值 1.80 2.00

図2 増悪既往群における喘息点数推移。スギ花粉飛散時期に喘息症状増悪の既往がある患者において、 ブランルカストの前投与は喘息症状増悪を抑制した。

また、事前のアンケート調査により過去3年 以内のスギ花粉時期に喘息症状が悪化した症 例は27名存在した。うちP群は1.29点から 1.18点へ多少の改善を認めたが、F群は1.8点 から2.0点へと喘息点数の若干の上昇を示した (図2)。さらに6週間投与前後における肺機能 検査の推移ではP群、F群共に有意な変化は認 められなかったが、調査期間中にP群17名は 喘息状態が比較的安定していたが、F群10名 中3例に状態の悪化が認められた(図3)。

考察

Bousguet ら¹⁴ は、アレルギー性鼻炎を合併する喘息患者は、合併しない喘息患者よりも発作回数や救急外来受診回数が多いと報告し、安場ら¹⁵ は、喘息入院患者の 46%がアレルギー性鼻炎を合併していたことを述べ、スギ花粉症合併喘息において、喘息症状の悪化が花粉症症状と同時かやや遅れて出現することを報告した。

Busse ら 160 は両疾患に共通するメカニズム として、鼻閉や気道炎症を引き起こすロイコ トリエンの関与を指摘している。Price ら 170 は、アレルギー性鼻炎合併喘息に対してはブ デソニドの倍量投与よりもモンテルカストを 併用した方がピークフローの改善効果が大き かったことを報告している。

国際喘息ガイドライン(GINA)ではアレルギー性鼻炎を合併した喘息の長期管理には LTRA 併用が考慮されている¹⁸。

今回我々の検討では、プランルカストの投 与により1秒量の有意な改善は認められな かったが、花粉飛散時期に喘息症状が悪化す る症例を対象としており、むしろ1秒量の低下 がなかったことは、増悪抑制に有効であった と考えられる。

花粉症に対する薬物治療として、プランルカストが有用であった報告 (**) は多く認められる。プランルカストを初めとする LTRA は特に鼻閉に有効 (**)で、他の抗アレルギー薬治療に追加投与することは短期に QOL を改善させると報告されている (**)。特にヒスタミン H1 拮抗薬との併用は相乗効果をもたらす (**)。その理由の1つにロイコトリエンによってヒスタミン受容体発現が亢進することが報告 (**) されている。荒木ら (**) は、スギ花粉症に対してプ

プランルカスト群 (n=17)

測定項目	投与前	6週間後	変化差
FVC (L)	3.81	3.67	-0.14
FEV _{1.0} (L)	2.12	1.90	-0.22
FEV1% (%)	72.52	75.46	+3.06
V50 (L/s)	2.92	2.94	+0.02
V25 (L/s)	0.99	1.11	+0.12

フェキソフェナジン群(n=10)

測定項目	投与前	6週間後	変化差
FVC (L)	3.43	3.30	-0.13
FEV _{1,0} (L)	2.64	2.48	-0.18
FEV1% (%)	77.1	77.1	±0.00
V50 (L/s)	3.27	3.02	-0.25
V25 (L/s)	1.14	1.78	+0.64

※調査期間中、10名中3例に喘息状態の悪化を認めた。

図3 喘息症状増悪既往群の肺機能推移。スギ花粉飛散時期に喘息症状増悪の既往がある患者において、 プランルカストとフェキソフェナシンの肺機能に対する比較では、共に統計学的有意差は認められ なかったが、F 群の3名に悪化を認めた。 ランルカストとベシル酸ベポタスチンの併用 が有効であったことを報告している。

LTRA は喘息とアレルギー性鼻炎の両疾患に適応があり、その有用性と安全性も評価されている IT lehimaru ら IT は、喘息関連のアレルギー性鼻炎患者を LTRA 投与群と投与しない群に分けて、投与 3 カ月後に QOL と肺機能を評価したところ、LTRA 投与群で有意な改善がみられたが、投与しない群では認められなかったことより、LTRA はアレルギー性鼻炎症状、喘息症状と肺機能を改善させたと述べている。

その他にもLTRAが花粉症合併喘息に有用である報告^{20, 20} は多い。季節型鼻炎合併喘息に対して、モンテルカストが Desloratadine より喘息症状および吸入 B 刺激薬の回数を減らした報告³¹ がある。安場ら²² はスギ花粉症合併喘息において、プランルカストとエバスチンの初期療法を比較した結果、ブランルカスト群の方が優れていたことを報告した。我々の検討では、ブランルカストと塩酸フェキソフェナジンで比較したが、鼻炎症状は P 群において改善したが、F 群では効果は得られず、肺機能を含んだ喘息状態に関しても P 群では比較的安定していたのに対し、F 群では 3 割の症例に増悪が認められた。

Sagara ら³⁰ は、喘息のない花粉症患者を対象に花粉飛散後に気道過敏性が亢進する症例の存在を指摘し、プランルカストとフェキソフェナジンの花粉飛散後の気道過敏性への影響を検討した結果、プランルカストが気道過敏性の亢進を抑制したことを報告している。

以上のことからも我々は花粉症合併喘息に は、ロイコトリエン受容体拮抗薬の初期療法 を推奨する。

結論

スギ花粉症合併喘息において花粉飛散時期 にロイコトリエン受容体拮抗薬を前投与する ことは、ヒスタミン H1 受容体拮抗薬を前投与 することに比べ喘息症状の増悪抑制および花 粉症症状の軽快に有効であることが示唆され た。

なお、本研究内容は第40回日本職業・環境 アレルギー学会および2009年国際アレルギー 学会(WAO)で発表した。

文献

- Grossman J. One airway, one disease. Chest 1997; 111: 11S-6.
- Soler M, Matz J, Townley R, et al. The anti-IgE antibody omalizumab reduces exacerbations and steroid requirement in allergic asthmatics. Eur Respir J 2001: 18: 254-61.
- 奥田稔.鼻アレルギー—基礎と臨床一,大阪; 医学ジャーナル社,1999:397.
- Yamauchi K, Tamura G, Akasaka T, et al. Analysis of the Comorbidity of Bronchial Asthma and Allergic Rhinitis by Questionnaire in 10,009 Patients. Allergology International 2009: 58: 55-61.
- 5) 上野香奈、美濃口健治、河野泰郎、ほか,気管 支喘息増悪要因としてのスギ花粉症の調査研 究.アレルギー2002:51:565-570.
- 6) 渡邉直人、今野昭義、中川武正、ほか、喘息と 花粉症の因果関係に関するアンケート調査結 果.アレルギー2006:55:1194.
- Cap P, Maly M, Pehal F, et al. Exhaled leukotrienes and bronchial responsiveness to methacholine in patients with seasonal allergic rhinitis. Ann Allergy Asthma Immunol 2009: 102: 103-109.
- 8) 馬場廣太郎. スギ花粉症の初期療法をめぐって. アレルギーの臨床. 2000: 20: 194-201.
- 9) 澤津橋基広、鷲崎政治、柿添亜矢、ほか. 鼻症 状を意識したスギ花粉症に対する初期療法と 飛散後治療との比較検討―初期療法は症状軽 減に有用である―. 医学と薬学 2006:55:105-118
- 10) 奥田稔、古内一郎、佐々木好久、ほか、スギ花 粉症に対するケトチフェン季節前投与の予防 効果、耳展 1986:29:276-293.
- 11) 今中政支、寺田哲也、竹中洋、ほか、IPD のス ギ花粉症に対する初期治療効果-3 施設同時

- トライアルー, 日本耳鼻科学会会誌 1998:37: 38-44.
- 12) 宮之原郁代、松根彰志、大堀純一郎、ほか、ス ギ花粉症に対するプランルカスト初期療法の 有用性、耳鼻 2009:55:31-38.
- 13) Sasaki K, Okamoto Y, Yonekura S, et al. Cedar and cypress pollinosis and allergic rhinitis: Quality of life effects of early intervention with leukotriene receptor antagonists. Int Arch Allergy Immunol 2009: 149:350-358.
- 14) Bousquet J. Gaugris S et al: Increased risk of asthma attacks and emergency visits among asthma patients with allergic rhinitis: a subgroup analysis of the investigation of montelukast as a partner agent for complementary therapy. Clin Exp Allergy 2005:35:723-727.
- 15) 安場広高、藤田修治、竹中洋、スギ花粉症は気 管支喘息の増悪因子となりうるか? 耳鼻免疫 アレルギー 2005: 23:19-23.
- 16) Busse W, Kraft M: Cysteinyl leukotrienes in allergic inflammation; strategic target for therapy. Chest 2005: 127: 1312-1326.
- 17) Price D.B, Swern A. Tozzi C.A, et al. Effect of montelukast on lung function in asthma patients with allergic rhinitis: analysis from the COMPACT trial. Allergy 2006: 61: 737-742.
- 18) GINA exective committee: Global Strategy for Asthma Management and Prevention, 2006.
- 19) 萩野飯、馬場譲治、入船盛弘、ほか、スギ花粉症に対するプランルカスト投与のQOLに与える影響(第1報)、アレルギー・免疫2008: 15:1566-1572.
- 20)清水保彦、片岡真吾、青井典明、ほか. スギ花 粉症におけるロイコトリエン受容体拮抗薬 (プランルカスト) の有用性の検討. 耳鼻免疫 アレルギー 2008: 26: 23-29.
- 21) 湯田厚司、吉村栄治、坂井田寛、ほか. スギ花 粉症に対するプランルカスト初期治療例での acoustic rhinometer による客観的鼻腔開存度 の評価。Prog. Med. 2004: 24: 465-469.
- 22) 菅原一真、御厨剛史、橋本誠、ほか、プランル カスト水和物追加投与の花粉症に対する短期 QOL 改善効果、アレルギー・免疫 2009:16: 92-98.

- 23) Ciprandi G, Tosca MA, Milanese M, et al. Antihistamines added to an antileukotriene in treating seasonal allergic rhinitis: histamine and leukotriene antagonism. Eur Ann Allergy Clin Immunol. 2004: 36: 67-70. 72.
- 24) Wilson AM, Orr LC, Sims EJ, et al. Effects of monotherapy with intra-nasal corticosteroid or combined oral histamine and leukotriene receptor antagonists in seasonal allergic rhinitis. Clin Exp Allergy. 2001: 31: 61-68.
- 25) Pynaert G, Grooten J, van Deventer SJ, et al. Cysteinyl leukotrienes mediate histamine hypersensitivity ex vivo by increasing histamine receptor numbers. Mol Med 1999: 5:685-692.
- 26) 荒木進、中村珠理、長谷川達哉、ほか、スギ花 粉症に対するプランルカストとベシル酸ベポ タスチンの治療効果. 医学と薬学 2009: 61:75-80.
- Virchow JC, Bachert C. Efficacy and safety of montelukast in adults with asthma and allergic rhinitis. Respir Med. 2006: 100: 1952-9.
- 28) Ichimaru Y, Kanazawa H, Kamoi H, et al. Correlations of Health-related quality of life questionnaire results in asthma and allergic rhinitis: effects of a leukotriene receptor antagonist. Journal of international medical research 2008: 36:559-566.
- 29) Philip G, Nayak AS, Berger WE, et al. The effect of montelukast on rhinitis symptoms in patients with asthma and seasonal allergic rhinitis. Curr Med Res Opin. 2004; 20: 1549-58.
- 30) Busse WW, Casale TB, Dykewicz MS, et al. Efficacy of montelukast during the allergy season in patients with chronic asthma and seasonal aeroallergen sensitivity. Ann Allergy Asthma Immunol, 2006: 96: 60-8.
- 31) Baena-Cagnani CE, Berger WE, DuBuske LM, et al. Comparative effects of desloratadine versus montelukast on asthma symptoms and use of beta 2-agonists in patients with seasonal allergic rhinitis and asthma. Int Arch Allergy Immunol 2003:130: 307-13.
- 32) 安場広高、佐藤寛、小林良樹、ほか、スギ花粉 症合併気管支喘息に対する花粉飛散期の

PRANLUKAST投与の効果.アレルギー·免疫 2008: 15:74-81.

33) Sagara H, Yukawa T, Kashima R, et al. Effects of pranlukast hydrate on airway

hyperresponsiveness in non-asthmatic patients with Japanese cedar pollinosis. Allergology International 2009:58:277-287.

Comparison of pranlukast hydrate and fexofenadine hydrochloride to symptom exacerbation in bronchial asthma with japanese cedar pollinosis during pollen dispersion

N Watanabe^{2,1)}, M Hoshino^{3,1)}, T Nakagawa⁴⁾, T Miyazawa¹⁾

- Division of Respiratory and infectious disease, Department of Internal Medicine, St. Marianna University School of Medicine, Kanagawa Japan
- Faculty of Pharmaceutical Sciences, Laboratory of Pharmacology, Josai International University, Chib a Japan
- Department of Respiratory Medicine, Atami Hospital International University of Health and Welfare, Shizuoka Japan
- 4) Shirahama Municipal Kawazoe Clinic, Wakayama Japan

Abstract

This is a comparative study of the efficacy of two drugs against both asthma symptom exacerbation and nasal symptoms in thirty-five outpatients with bronchial asthma accompanied by Japanese cedar pollinosis during pollen dispersion. Subjects were divided into two groups as 22 patients who had administered pranlukast hydrate (450mg/day) of leukotriene receptor antagonist (LTRA) (group P) and 13 patients who had administered fexofenadine hydrochloride (120mg/day) of histamine HI blocker (group F) at pre-pollen dispersion. And the evaluation was estimated by symptom score of asthma diary with nasal symptoms and lung function test.

In results, nasal symptoms improved from 2.78 to 1.98 points in the group P, but they didn't change as 3.39 points in the group F. And asthma condition was good in all of 17 patients in the group P, however asthma symptoms deteriorated in 3 of 10 patients in the group F.

It is considered that LTRA is very useful to inhibit asthma exacerbation and nasal symptoms by allergic rhinitis and its effect is more useful than histamine H1 blocker.

Key Words: Bronchial asthma, Japanese cedar pollinosis, Leukotriene receptor antagonist, Pranlukast hydrate, Fexofenadine hydrochloride 原著

アトピー性皮膚炎患者の仕事に対するストレスとその解消法の アンケート調査

杉浦真理子、杉浦啓二、前田晴美

第一クリニック皮膚科・アレルギー科

抄 録

(目的) アトビー性皮膚炎は原因が単一ではなく様々な要因が関与する。その中で仕事や家事による肉体的、精神的ストレスが悪化の一つであると知られている。今回、実際にストレスと皮疹の悪化がどの程度 関与しているのかアンケート調査により実態を把握することを目的とした。

(対象) 16歳以上のアトピー性皮膚炎患者

(方法) アンケート調査について説明し、同意のあった思者に対し、アンケート用紙を渡し記載してもらった。

(結果) 同意の得られた症例は 231 例 (男性 74 例、女性 157 例、平均年齢 34.7 歳) であった。職業は会社員 (事務) 39 例、会社員 (営業) 22 例、会社員 (その他) 30 例、自営業 14 例、公務員 6 例、主婦 26 例、アルバイト 33 例、美・理容師 3 例、医療従事者 13 例、学生 25 例、その他 18 例、未記入 2 例であった。

「今までに仕事に関する肉体的ストレスによりアトピー性皮膚炎が悪化したことがあるか」の問いに対し、ある 133 例(57.6%)、ない 98 例(42.4%)であった。「今までに仕事に関する精神的ストレスによりアトピー性皮膚炎が悪化したことがあるか」の問いに対し、ある 132 例(57.1%)、ない 98 例(42.4%)、未記入 1 例(0.5%)であった。肉体的または精神的ストレスにより、アトピー性皮膚炎の症状悪化を経験した患者(174 例)に対し、どのように対処したかを質問した(複数回答可)。「内服を増量または強い薬へ変更した。」69 例、「外用を強い薬に変更した。」90 例、「なにもしなかった。」28 例、「仕事を休んだ。」26 例、「仕事をかえた。」8 例、「仕事をやめた。」13 例、その他 27 例、未記入 1 例であった。「ストレス解消法はあるか」の問いに対し、「ある」129 例(74.1%)、「ない」37 例(21.3%)、未記入 8 例(4.6%)であった。ストレス解消法があると回答のあった 129 例に対し、「ストレス解消法により皮疹は改善しますか」との問いに、「改善する」23 例(16.8%)、「改善するときとしないときがある」89 例(65.0%)、「改善しない」17 例(12.4%)、未記入 8 例(5.8%)であった。

(結語) 仕事に対するストレスによるアトピー性皮膚炎の悪化は少なくないが、患者自身が何らかの方法でストレス解消を試みていることが多い。ストレス解消法により皮疹が改善する場合と改善しない場合がある。今後、個々の患者に合わせた新たなストレス解消法の提案が必要である。

キーワード:アトビー性皮膚炎、ストレス、アンケート調査

〒 460-0008

名古屋市中区栄 2-1-1 日土地ビル 2F 第一クリニック皮膚科・アレルギー科 杉浦真理子 TEL & FAX 052-204-0835

はじめに

アトピー性皮膚炎の発症には、アレルギー 性機序と非アレルギー性機序の両者が係わる とされている。非アレルギー性機序の一つに ストレスがあげられる。

心因的要素がアトピー性皮膚炎の症状に影

響することは、日常診療の場で経験するが、具 対象 体的にどのように対応し、通常の皮疹の治療 に加えて、心因的要素に対する補助的治療を 行うべきか、一定の方針は定まっていない。

今回、アトピー性皮膚炎患者が、どの程度仕 事に対するストレスを感じているのか、スト レスと皮膚症状がどの程度関連するのか把握 し、ストレス解消法について検討した。

16歳以上のアトピー性皮膚炎患者

方法

アンケート調査について説明し、同意の得 られた患者に対し、アンケート用紙(表1)を 渡し記載後受付で回収した。

表1 アンケート項目

1 職業を選んでください

会社員 (事務)

会社員(営業)

会社員 (その他)

自営業

公務員

主婦

アルバイト

理容師、美容師

医療従事者

学生

その他

- 2 今までに仕事(家事、学業)に関する肉体的ストレス(体力的な疲れ)により、 アトピー性皮膚炎が悪化したことがありますか。
- 3 どのような肉体的ストレスでしたか。
- 4 今までに仕事(家事、学業)に関する精神的ストレス(人間関係など)により、 アトピー性皮膚炎が悪化したことがありますか。
- 5 どのような精神的ストレスでしたか。
- 6 肉体的ストレス又は精神的ストレスにより症状が悪化した時の対処法について 当てはまる項目に○をつけてください。(複数可)

飲み薬を増やした、または強くした

途り薬を強くした

なにもしなかった

仕事 (家事、学業) を休んだ

仕事 (家事、学業) を変えた

仕事 (家事、学業) をやめた

その他

- 7 ストレス解消法はありますか。
- 8 ストレス解消法の具体的な方法をおしえてください。
- 9 ストレス解消法の実施により皮疹は改善しますか。

結果

同意の得られた症例は 231 例 (男性 74 例、 女性 157 例、平均年齢 34.7 歳) であった。

職業は会社員(事務)39例、会社員(営業) 22 例、会社員(その他)30 例、自営業14 例、 公務員6 例、主婦26 例、アルバイト33 例、 美・理容師3例、医療従事者13例、学生25 例、その他18 例、未記入2 例であった。

「今までに仕事に関する肉体的ストレスによりアトピー性皮膚炎が悪化したことがあるか」の問いに対し、ある 133 例 (57.6%)、ない 98 例 (42.4%) であった。

肉体的ストレスの主な内容は、睡眠不足 33 例、残業・長時間労働 27 例、育児・介護 10 例、夜勤 5 例であった。

「今までに仕事に関する精神的ストレスによりアトピー性皮膚炎が悪化したことがあるか」の問いに対し、ある 132 例 (57.1%)、ない 98 例 (42.4%)、未記入1 例 (0.5%) であった。

精神的ストレスの主な内容は対人関係 47 例、仕事量・営業成績・仕事での評価 26 例、 勉強・受験 8 例、育児・介護 5 例、いじめ 2 例、顔面の皮疹があるのに人前にでなくては ならない 2 例であった。

肉体的または精神的ストレスにより、アトピー性皮膚炎の症状悪化を経験した患者(174例)に対し、どのように対処したかを質問した(複数回答可)。「内服を増量または強い薬へ変更した。」69例、「外用を強い薬に変更した。」90例、「なにもしなかった。」28例、「仕事を休んだ。」26例、「仕事をかえた。」8例、「仕事をやめた。」13例、その他27例、未記入1例であった。

その他の対処法については、休養、休憩を増 やした5例、外用回数をふやした4例、精神科、 心療内科受診3例、指圧など2例が主な内容で あった。

「ストレス解消法はあるか」の問いに対し、 「ある」129 例 (74.1%)、「ない」37 例 (21.3%)、 未記入8 例 (4.6%) であった。 ストレス解消法の主な内容は、睡眠 25 例、 スポーツ 23 例、旅行 20 例、買い物・外出 19 例、読書 8 例、音楽鑑賞・楽器演奏・カラオケ 15 例であり、ストレス解消法は単独ではなく 複数試していることが多かった。

ストレス解消法があると回答のあった 129 例に対し、「ストレス解消法により皮疹は改善しますか」との問いに、「改善する」 23 例 (16.8%)、「改善するときとしないときがある」 89 例 (65.0%)、「改善しない」 17 例 (12.4%)、未記入8 例 (5.8%) であった。

考察

今回のアンケート調査で、ストレスにより アトピー性皮膚炎の悪化を感じたことがある 患者は174例(75.3%)であった。ストレスを 感じる原因はさまざまである。またストレス による皮疹の悪化に対し、内服薬の変更、外用 薬の変更、外用回数の変更など、対応が各々ち がった。ストレス解消法については、単独の 解消法を実行するより、複数の方法を試して いる場合が多い。また状況により、ストレス を取り除く努力をしても、皮疹の改善につな がらない場合がある。

片岡は不登校とアトビー性皮膚炎、鬱病とアトピー性皮膚炎の関係は、単純な因果関係ではなく、円環関係または相互関係をなし、悪循環により皮疹が難治化すると考えた。そのため、皮膚炎の治療に加え、心理精神的治療、社会的因子への介入により、難治性皮疹が改善することが多いと報告した。今回の調査対象のなかにも、すでに精神科や心療内科で治療を受け、ストレスによるアトピー性皮膚炎の悪化を最小限に抑える努力をしている症例があった。

今回の調査では皮疹の悪化につながるストレスとして、睡眠不足、長時間労働といった回答が多く、実際に患者が必要とする睡眠時間の確保が難しい状況であり、このことが皮疹の悪化につながることが明らかになった。そ

のため、ストレス解消法として、睡眠を十分に とると回答した症例が多い。アトピー性皮膚 炎患者では夜間掻破行動が著明な場合があり、 これが睡眠障害や生活パターンの昼夜逆転を 引き起こし問題となることもある²⁰。睡眠時間 の確保とともに、夜間覚醒についても注意す る必要がある。

草間らは皮膚科医によるアトピー性皮膚炎 患者への問診と必要に応じて精神科医による 診察、心理テストから、患者を4群(0群:心 理社会的要因が皮疹の増悪に関与していない 群、1群:精神的に大きな問題はないが、職業、 家庭、学業などのストレスで皮疹が増悪して おり、これらは心身症として傾聴を主体に皮 膚科で対応すべき群、2群:過敏性腸症候群な ど他の心身症や心気症を合併しているが、皮 膚科定期通院が可能な群、3群:うつ病、人格 障害なその精神障害を有し、精神科的な治療 が優先される群)に分けたところ、患者の 93.5%は心理社会的因子がアトピー性皮膚炎 の増悪に関与していると報告した。ストレス の原因は個々の患者で異なるが、患者の思い を共感的、受容的態度で受け止め、そのつらさ をねぎらい、患者のストレスに対する対応に 変容が起こるよう促すこと、患者の努力を誉 め、励ますことがアトピー性皮膚炎の治療継 続につながり、安定した皮膚症状を保つこと

ができる。

今回の調査より、種々のストレス解消法を 試している患者が71.4%であり、我々はそれを 見守り、励ますことが重要である。一方、 21.3%の患者はストレスを感じ、ストレスが皮 疹を悪化させていると感じているが、ストレ ス解消法がないと答えている。このような場 合は積極的に患者の日常生活パターンを把握 し、ストレス解消法の提案を行うとともに、場 合によっては、自立訓練法や行動療法等の心 理療法や向精神薬の併用®を検討すべきである と考える。

文献

- 片岡葉子、アトピー性皮膚炎への心身医学的 アプローチ、皮膚の科学 2009:8 増 12:581-585.
- 2) 片山一朗、室田浩之、北場後、皮膚のストレス 応答から考えるアトピー性皮膚炎の治療指 針、皮膚の科学 2009:8 増 12:595-602.
- 3) 草間美紀、米本広明、井上奈津彦他、成人型ア トピー性皮膚炎における心理社会的増悪因子 の評価と治療への反映、臨皮 2002:56:195-198
- 4) 上出良一、アトピー性皮膚炎の増悪因子となるストレッサー、皮膚の科学2009;8増12:611-616.
- 5) 羽白誠、アトピー性皮膚炎における心身医学 的対応のポイント:総論、皮膚の科学 2009:8 増12:625-629.

Questionnaire study of on-the-job stress and the way to relieve their stress in atopic dermatitis patients

Mariko Sugiura, Keiji Sugiura, Harumi Maeda

Environmental Dermatology and Allergology, Daiichi Clinic

Abstract

We tallied up 231 cases (74 male and 157 female, average age was 34.7 years old). There were 39 office workers, 22 sales representatives, 22 other company employees, 14 self-employed individuals, 6 public service workers, 26 homemakers, 33 part-timers, 3 beauticians, 13 healthcare personnel, 25 students, 18 with other occupations and 2 who did not answer. Question1; Have your atopic dermatitis symptoms ever worsened as a result of physical exertion when you had on-thejob stress? Answer 1; 133 cases (57.6%) answered 'yes' and 98 cases (42.4%) answered 'no'. Question2: Have your atopic dermatitis symptoms ever worsened as a result of on-the-job psychological stress? Answer 2:132 cases (57.1%) answered 'yes', 98 cases (42.4%) answered 'no' and 1 case (0.5%) did not answer. Then, we asked Questions 3 and 4 to 174 cases who had on-the-job stress physically and/or psychologically, and their symptoms worsened. Question 3; How do you treat your symptoms (multiple answers allowed)? Answer 3:69 cases increased oral medications or they took stronger internal medicines. 90 cases used stronger topical medicines, 28 cases didn't do anything, 26 cases took time of work rested, 8 cases changed their job, 13 cases quit their job, 27 others and 1 case did not answer. Question 4: Do you have a way to relieve your stress? Answer 4; 129 cases (74.1%) answered 'yes', 37 cases (21.3%) answered 'no' and 8 cases did not answer. Then, we asked Question 5 to 129 cases who answered 'yes' in Question 4. Question 5 : Did your symptoms improve after attempting to deal with your stress? Answer 5 : 23 cases (16.8%) answered 'yes', 89 cases (65%) answered 'sometimes, depending on the situation', 17 cases (12.4%) answered 'no' and 8 cases (5.8%) did not answer.

Key words: atopic dermatitis, on-the-job stress, questionnaire study

第 42 回日本職業・環境アレルギー学会 総会・学術大会(予定)

会 期:平成23年6月3日(金)・4日(土)

会 場:名古屋国際会議場 (〒 456-0036 名古屋市熱田区熱田西町 1-1)

TEL: 052-683-7711 FAX: 052-683-7777

会 長:内藤 健晴 (藤田保健衛生大学医学部耳鼻咽喉科)

連絡先:〒470-1192 愛知県豊明市沓掛町田楽ケ窪 1-98

TEL: 0562-93-9291 FAX: 0562-95-0566

事務局長:櫻井一生、岩田義弘

日本職業・環境アレルギー学会雑誌 第17巻第2号 OCCUPATIONAL AND ENVIRONMENTAL ALLERGY (Occup Environ Allergy)

編集委員

委員長 土橋 邦生

委員 宇佐神 篤 佐藤 一博 杉浦真理子

須甲 松伸 高木 健三 土橋 邦生

発 行 所 日本職業・環境アレルギー学会

〒 371-8514 群馬県前橋市昭和町 3-39-15

(群馬大学医学部保健学科内)

027-220-8944 (Tel&Fax)

URL http://oea.umin.jp/

発行日 平成22年5月31日

印刷 所 株式会社協同コンベンションサービス

〒 105-0003

東京都港区西新橋3丁目2番1号 共同ビル

OCCUPATIONAL AND ENVIRONMENTAL ALLERGY

Vol. 17 No.2

May 2010

REVIEWS:

Occupational Contact Dermatitis		
in Hairdressers and Barbers	K. Nishioka	(1)
ORIGINALS:		
The study of occupational skin disease	K. Sugiura, et al.	(11)
Change in helium-flow-volume curve		
by anti-asthmatic agents in bronchial asthma patients.	S. Isogai, et al.	(17)
Comparison of pranlukast hydrate and fexofenadine		
hydrochloride to symptom exacerbation in bronchial ast	hma	
with japanese cedar pollinosis during pollen dispersion	N. Watanabe, et al.	(25)
Questionnaire study of on-the-job stress and the way		
to relieve their stress in atopic dermatitis patients	M. Sugiura, et al.	(35)